

Asia Center News



アジアセンターニュース

2004 No. 26

独立行政法人国際交流基金アジアセンター
The Japan Foundation Asia Center



表紙作品紹介
 笹口 数
 《電気クラゲ研究》2004年

1962年、東京生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。ロンドンのチェルシー美術デザイン大学美術学部修士課程修了。

ひとりの人間がより多くの情報に接することができるようになれば、その表層を素早く眺めることはできても情報を成立させる仕組みについて注意を払う時間がますます減ってくる可能性がある。それでも、常に私たちは表層にあるものから意味や記憶を想起しつづけるだろう。集合的な記憶とイメージの間には宗教、政治、マーケット、科学、芸術などを貫く興味深い関係が潜んでいる。

笹口数は、そうした見えぬものの領域を形作る仕組みに対して鋭敏な感覚をはたらかせる。地図にちりばめられた地名、化粧品品の品番、街の風景を映し込む車体から大量の情報を排出する印刷技術にまでその関心は及ぶ。かつて邸宅であった空間に、まるでそこに佇む人の気配を感じさせるように小さなボールの配置だけで構成した作品などは、気まぐれな知覚とその対象となるフォルムの関係を示唆する。

こうした作品の制作を可能にしているのは、非常に丹念な調査である。「電気クラゲ研究」では、彼が蒐集したテレビや映画、雑誌などのメディアを通して何気なく眼にしている、片手を上げているさまざまな人の身振りを、いわばイメージのアーカイブとしてちりばめている。（「アウト・ザ・ウインドウ」展カタログより）

巻頭座談会
アジア事業の今後 その可能性 1
 石井 米雄 × 四方田 犬彦 × 大橋 正明

開高健記念 アジア作家講演会シリーズ13
激動の現代史を生きた女性作家のカンボジア 9
 パル・ヴァンナリーレアク氏講演会
 「人や社会に役立つ人間になれ」という父の言葉に近づくために
対談「生きるために書くこと、書くために生きること」 11
 小山内 美江子 × パル・ヴァンナリーレアク

アジア理解講座
茶文化に見るアジアとヨーロッパの交流 14
 滝口 明子

次世代リーダーフェロシップ・プログラム
ラオスの教育現場から 16
 瀧田 修一

助成事業報告
伝統を再想像する 18
 T. サシタラン

ロシア、日本、中国と受け継がれた街並み
大連の都市建設 20
 金 壽幸

事務所便り~マニラ~
フィリピンのプロバスケットボールリーグ 24
 上杉 啓明

インフォメーション 25





「アンダー・コンストラクション:アジア美術の新時代」展(2002年度)

巻頭座談会

アジア事業の今後—— その可能性

出席者:石井 米雄 × 四方田 犬彦 × 大橋 正明

司会:小松 諄悦(国際交流基金アジアセンター事業部長)

国際交流基金は、2003年10月に独立行政法人として新たなスタートを切った。いっそう効果的な事業展開をめざして、各種プログラムの統合、廃止、簡素化を行ない、2004年5月より新たな柱である文化・芸術交流、日本語、日本研究・知的交流の3分野のもと、全事業を再編成。アジアセンターで実施してきた各種事業もこの3つの部門に引き継がれ、地域別の戦略を強化しながら継続されていく。今後の国際交流基金の対アジア事業、そして新体制での新たな交流事業の可能性について、アジアへの関心とともに歩んでこられ、またこれまで国際交流基金の対アジア事業に多くのご協力やご助言をいただいていた石井米雄氏、四方田犬彦氏、大橋正明氏に語っていただいた。

小松 二〇〇三年、二〇〇四年は国際交流基金(以下、基金)によって非常に大きな変革の年になりました。二〇〇三年一月一日に特殊法人から独立行政法人に変わり、それと同時に五月六日からの新組織発足に向けて現在改革を進めているところです。国際交流基金は一九七二年に創立され今年で三十二歳になりますが、この間にプログラムが際限なく膨らみ、石井先生からは組織として硬直してきているというお叱りをいただいています。そういうことを意識しながら、今までできなかったことを、法人格が変わるのを契機にやってみようというわけです。また全体の組織改革のなかで、アジアセンターのあり方も見直して、「どうして」という議論があります。このような過渡期にあたって、本日はアジアセンターを振り返りながら、しかし後ろばかりを見るのではなく、今後の新たなアジアとの交流について考えていきたいと思えます。本日お集まりの皆様には、これまでさまざまな形で基金の事業にご協力いただけてきましたので、基金の対アジア事業、あるいはアジアセンターに対してどのような印象をお持ちか、お聞かせください。

四方田 私、大学で映画史と映画理論を教えますが、映画は他の学問と違い、国別、語学別に「ごらわらず、映画ではおねばすべし」でお付き合いしようという立場です。映画の勉強を本格的に始めたのは八〇年代ですが、ちょうど韓国滞在が終わって帰ってきた年に基金が「南アジア映画祭」を開催した。インドネシアやタイやインドにこんな映画があるのかと非常に驚きました。今から考えてもあのときのライオンマンは、当時のアジアの最高レベルで、それぞれの国のトップスターや監督が十人くらい並んでいた。本人たちにとっては、今後おそろしく二度とない機会だったでしょう。この映画祭

を観た人たちがその後配給会社に入ったりして現在活躍している。これは、アジアセンターができる十五年前の話ですが、その頃の映画人、映画ファン、学生などが国際交流基金という名を認識した最初でした。当時はお役所というより、二つ二つ映画を見せてくれるところというイメージですね。

九〇年代半ばくらいまでは、日本では海外の映画に対してある種のステレオタイプがありました。それは、ハリウッドは娯楽、ヨーロッパは芸術、そしてアジア映画は歴史の勉強、つまり民族の苦悩を真面目に訴える映画がアジア映画であるという分け方です。逆に言えば、アジア映画には芸術はない、あるいは、アジア映画に娯楽的要素を見るのは不真面目だということですね。日本ではこの二つの分類によって、外国映画が公開されていたのですが、南アジア映画祭「は兎事」にその概念を壊してしまっただけです。そして二〇〇四年の今、アジアには極めてエンターテインメント性の高い映画がたくさんある。実はその後、アジアの大衆芸能や民間伝承、歴史的なシネマリズム、創る人間、観る人間のコンセンサスとしての歴史認識と精神性のようなものがあることがわかってくるのですが、これらを含めて若い世代のアジア認識を変えたのが、南アジア映画祭だったと思います。食べ物が好きとか、映画の俳優が好きとか、いつかは人間の情動に無意識に関わることです。インテロギーよりもっと下部のところで人間を動かすもので、嘘がつけない、そういうものとしてアジアが入ってきたということだと思います。

基金の中にアセアン文化センターができて、それがアジアセンターになって、という変化は、いわばハチキがブリになったようなものですが、その過程で日本におけるアジアの文化を先導してきたところがあります。アジア映画の個人的な研究者として言えば、誰も観たことな

いものを私が得意になって、観たぞ、観たぞ」と言って論文を書いても、映画の場合は意味を成しません。それなりの数のいろいろな人たちが、その映画を観ている状況が必要なのです。その意味で、アジアセンターでの上映活動やシンポジウム活動を通して喚起され、また、こちらがそれに協力する、というかたちで運動が生まれたと思えます。有機的な運動があるからこそ、学問が成立するのです。

大橋 私の場合、学生時代にインドと出会ったことからすべてが始まりました。大学卒業後にインディ語をインドで勉強しましたが、卒業しても仕事がないので、シヤンランビル市民による海外協力の会」として日本のNGOで「ハングランド」に草鞋を脱いだところから、NGOの開発、貧困、ボランティアという世界に足を踏み入れました。援助の対象というより、初めからインドが好きだという気持ちが強かったです。道端で買ったインディ語の「ラーマヤナ」の台本を、仲間と翻訳して上演するなど、私自身、南アジアで遊ぶことが大好きだったので、八二年末に帰国してシヤンランビルの事務局長をもちいるとき、アセアン文化センターができた、という話を聞きましたが、なぜ南アジアが入らないのか疑問に思いました。アジアとは何なのか、その選択は、一体どうして理由で行なわれたのかと少しショックでした。その後、アジアセンターが実施したアジアの助成財団やNGOの調査事業や「アジア・リーダーシップ・エリート・プログラム」に参加し、東南アジアから始まったプログラムに、何年か遅れた形で、東アジア、南アジアが含まれていく過程を見てきました。人脈の深さとか、つながりの濃さといった濃淡が、アジアという地域的なもの、時間的なものとして出てきているように思えます。ただ、気になるのは、その国や地域との関わりを選ぶ際の視点と、中期的、長期的な戦略の問題です。そこが見えにくいという印象はあります。

石井 アジアセンターのあり方が変わる可能性がある、ということですが、アジアセンターが存在することによって、前から基金に足りないと感じていた問題が部分的に克服されている面はあったと思えます。それは、地域性と機能性の関係です。例えば、部署を地域性で限定する、ある地域のことを一生懸命やっていたら、地域ごとの縦割りが起きる。逆に機能に絞ると、地域性がまったく見えてこない。例えば、知的交流といった場合、タイの知識人がアメリカの知識人ならわかるけれど、一般に知識人というカテゴリーはないんです。それなのに、地域性と機能性が交わるチャンネルがないので、具体的な地域とか文化的な背景を除いてしか知識人交流が考えられないという現象が起こる。これは非常に具合が悪い。基金にもそういうところがあり、ある人が日本研究で招待されるのか、知的交流で招待されるのかかわからない。要するに、同一人物がまったく違うカテゴリーで見られてしまう場合がある。これは役所としてある程度仕方ないことですが、一方でアジアセンターでは、アジアという汎漠とした括り方をすることで、そこに機能性と地域性の両方を兼ね備えざるを得ない状況が生まれ、ものすごくいいと思っただけです。文化交流はある特定の人や特定の文化を頭に入れて考えなければいけない仕事ですが、いくら個人的なペースで話しても組織がなかったら、当然のことながらお金は一銭も出ないわけです。一方で、組織の理論は匿名性(匿名性)であり、特定の個人の好き嫌いや、良し悪しで判断をしてはいけないことになっている。つまり、そのような相反する、でき、そうにもないことをやっているのが、アジアセンターだと理解していましたが、個人の問題を組織にとっはめていくか、という構造的な問題を常に頭に入れておいてほしいと思えます。

小松 ありがとうございます。印象としては



おはし まさあき
大橋 正明

恵泉女学園大学人文学部国際社会文化学
科教授/NPO法人シャブラニール代表理事。
東京都出身。早稲田大学政経学部卒業。バ
ングラデシュで農村開発プロジェクトを実施す
る「シャブラニール=市民による海外協力の会」
の現地駐在員と事務局長、国際赤十字のバ
ングラデシュ駐在員を経て現職に。著書に『不
可触民と教育』(明石書店、1999)など。



よもと いぬひこ
四方田 犬彦

明治学院大学文学部芸術学科教授。兵庫
県生まれ。東京大学文学部卒業、同大学院(比
較文化)修了。文学、映画、アジア論などを専
門とする。1993年『月島物語』で齋藤緑雨賞、
2000年『モロッコ流涕』で講談社エッセイ賞を
受賞。



いしわい よねお
石井 米雄

神戸外語大学学長。東京都生まれ。東京外
国語大学(シャム語)中退後、1955年に外務省
に入省。65年京都大学助教授、東南アジア研
究センターを経て教授、センター所長。90年
退官後、上智大学教授、97年から現職。著書
に、『タイ近世史研究序説』(岩波書店、1999)
など。

かなり核心に迫るお話をいただきましたが、あ
る程度の評価をいただいているのかなと感じま
す。例えば、石井先生がお話しになったアノニ
マスではない交流について言いますと、基金で
はアセアン文化センターのころから専門員制
度を設けています。職員の場合は、どうして三
年、場合によっては二年で人事異動があり
ますが、専門員は継続して一分野に關わって
いくことが出来る。基金の事業は、日本の文
化を紹介し、外国の文化を紹介し、
というところで終わりがちなのですが、一緒に
汗を流して、知恵を出し合っって何かを作りま
しよ、という、自ら仕掛けていく、タナシム
のよ、なものを意識してきたのが、アセアン文
化センターであり、アジアセンターです。アジ
アセンターの場合、知的交流、文化振興、それか
らアジアの社会・文化を日本に紹介するとい
う三つの柱がありますが、ここでいう知的交流
は、行ったり来たりといつたり、一緒に
考えようという姿勢です。文化振興の場合も
一義的な文化協力ではなくて、人材育成でと
もに汗を流し、しよ、というものです。アジ
アの文化紹介にしても、ただ持ち込んで紹介す
るのではなく、アジア四方国共同で、ササウイ

ンスといつオム、ハハの映画を作ったり、リア
という共同制作の舞台を作っています。昨年
はアジアのキュレイターが共同で、アンター・コ
ンストラクション」という大規模な展覧会をす
るなど、一緒に何かを作っていくという姿勢は
かなり早くからあります。そういう意味では
石井先生が以前からあつしよ、っている、直流と
いつよりは交流の方向性を強く意識してやっ
てきていると思います。
また、なぜアセアンなのかという話がありま
したが、当時、アジア地域の基金の事務所は
アセアンにしかなかったんです。基金のキャパシ
ティーでは、インドや中国までは手が回ら
ないで、国際交流基金の体力に見合ったも
のとして、アセアンから始めたという事情があ
ります。

日本のアジア認識

石井 「日本はアジアか」という問題設定があ
りますが、私は日本人にアジア人という意識
がとだけあある疑問に思っています。私の友
人の新聞記者はアジアが好きで、上司からア
メリカに行け、ロンドンに行けと言われてもア
ジヤばかり回っている。その新聞社は表向き
はアジアは重要だと強調していますが、彼は会
社の中では変わり者扱いされているんです。
日本のインテリは、アジアの中の日本」と口で
は言いますが、本当は福沢諭吉の「脱亜論」
を脱しきっていない。日本人は遣隋使、遣唐
使の時代以来、人間を媒介にしてアジアと関
わった歴史をほとんど持っていない。一方
で、唐詩も日本語で読んできたくらいですが、
長い中国文化の受容があります。インドにつ
いても、サンタクリットとか仏教学の伝統は世
界でトップですが、現代インドに関心を持つ人
は極めて少なかった。戦後も援助の対象とし
てしか見てこなかった。非常にいびつなアジア
認識がありました。しかし、今やアジアの人
間を発見しつつあると感じています。何かわか
らないけれど、結果としてアジアは、いつたとい
うのがわかってきている。その中で、知的交流に
しよ、日本の文化紹介にしろ、新しいパラダイ
ムを見つけるための基金の役割はものすく
大きいですね。

四方田 私は学生たちに「日本はアジアであ
ることを恐れないように」といつも言っていま
す。先日モントリルに行きましたが、モントリル人
は自分たちはアジアにありながら、いち早くヨ
ーロッパ化を成し遂げた国である」という意識
を持っています。日本みたいな純粋な東洋で
はなく、我々こそ西洋と東洋の中心にあり、そ
の両方を兼ね備えている」という意識です。香
港でも、やはり自分たちは西洋と東洋の真ん
中であると思っています。おそらくインドも、知
識人においては欧州の経験が日本よりもま
と構造化されていると聞いています。つまり、西
洋と東洋の真ん中に属している国だとか文明
だといふ言い方は、アジアの多くの国での共通
した言説であり、これがアジアの特徴ではない
かと思うのです。そういうことを言わないのは、
中華思想のある国だけですが、僕はそれを含
めてアジアであると思いたい。日本も非
常に特殊ですが、自分たちは、ヨーロッパ
化したつもりでいる学生たちに対しては、それ
は違ふよ、我々は儒教と仏教の教えの中にい
るではないかと言っています。これは石井先生
のおっしゃったことに対して決して矛盾はして
いないと思います。

いけないように思います。しかし私はその認識を壊すべきだと思えます。日本人は、表情が読めるところへらいまでが同族だ。アラブの人はわからないと言いますが、わからない人と向き合つてが大切な事です。今度、基金の中のアジア部門がいろいろな形で発展していくのであれば、ベルシヤとインド、その他のアラブ諸国、それからイスラエルも考えるべきだと思えます。アメリカ文化は、国際交流基金が何もなくても商業主義的に入つてくる。ところがアジアの文化は、きちんと枠組みを作つてあげなければ入つてこない。

石井 イナムム世界とどうして日本人は一枚岩のイメージで捉えがちですが、実は三つの文化圏に分かれていたんです。アラブ文化圏、ベルシヤ文化圏、もう一つはトルコ文化圏。ベルシヤつまりインドと三つのはちまたも「酒がしまじぞ、姉ちゃんをきれいだ」という文化があった。インドでそのイメージが棄るわけですが、この三つの文化圏はそれぞれ違った形での切り口がある。西アジアとの交流をもっと進めるべきだ、という意見にはまったく同感です。

大橋 南アジアの人にとって日本がどういふ風に見えるか、三つの雰囲気になります。インド、ベルシヤ、インドの三つはアメリカ、ヨーロッパから見ると、インドのイメージは、タートルと岡倉天心が言った。インドはひとつの言葉をもよほし引きかたに出します。日清・日露戦争で中国とヨーロッパの一角のロシアを破った日本はインドの友人だ、とか、原爆まで落とされてくるのに、なぜアメリカと仲よくするんだ、というロシアの目もある。しかし、どなただけ彼らにアジアと三つ意識があるのか、私は疑っています。アメリカ人といふ共通性から、欧米により親近感を持つ傾向が強い。一方庶民のレベルでは、日本といえは、インドなどの電化製品、この壁をどう乗り越えていくかは重要だ。南アジアで基金の事

務所があるところはまだいいですが、ない地域では、すくなく難しいのではないだろうか。その辺りを重層的にカバーするシステムが、パンゲテシユのような辺境に開く身としては、とても気がかかる。エキセントクな日本が、経済力の日本か、という両極端の間の溝をどう埋めていくかは、この地域では依然として大きな課題です。その解決を全部基金に求めるのも、大きすぎる期待なのかもしれない。

小松 確かに、日本の文化を紹介する、という基金の伝統は、アジアセンターの視野には入っていないから、たのすが、新しい組織でアジアを横断的に見ながら、地域戦略確保の仕組みをどう作っていくか、今、工夫しているところなんです。

国際交流における言語の重要性

石井 現在私はEU、欧州連合の言語について調査していますが、知的交流をするうえで、言語は大きな問題です。例えばEUで使われる言語には、二つのレベルがあり、作業語は英語、フランス語、ドイツ語です。その他に公用語と、十一カ国語が該当します。例えばギリシヤやハンガリーは、言語権」といふ言葉を使って、公文書は西国語でなければ、受け取らないと主張するわけです。EU参加国は二〇〇四年四月から二十五カ国になりますから、膨大なお金を翻訳に使うことになる。しかし、それについて誰も文句を言わない。それへらい、彼らは言語について緊張感があるわけです。

ところが、わがアジアの場合には、どういふ緊張感がまったくな、全部英語で、すべて通じてしまつて、インドネシヤとある交流事業で、僕が司会を務めたとき、今日は英語でやると言つたことがあります。そうした、インドネシヤの有名な女優で、映画制作者でも、有名なシン・カム氏が手を挙げて

「私は嫌だ」と、彼女は英語がうまいです。ところが、私の気持ちは、インドネシヤ語でしか話せない。たまたま、インドネシヤ語に堪能なメンバーが通訳してくれましたが、彼女のよう、な国際的な知識人が、自分の気持ちは英語では表わせないと、言いきつた。これに非常に重要性を感じたんです。我々が知的交流をするときに、世界に五千も六千もある言語を全部通訳することは、できない。しかし、何を媒体として、知的交流をするのか、ということについて、もっと意識的であつて、いいと思う。英語だけでは、すくなく、抜けてしまつ部分があると思えます。

基金のユニーター事務所で、日本の中国専門家と、インドの中国研究者との会議があつたのですが、どうも話を通じない。理由は英語だから、「中華思想」とか、中国」といふ「コンセプト」を英語にする、と、おぼせ、チャイナ」でおぼせ、なんです。で、日本から参加した研究者は二人とも、いらして、いた、ああ、いつのを見る、と言語の問題、というのは、大きいと思えます。

四方田 この国にも英語をしゃべる人はいます。その人たちが、わたくら、自国の文化に愛情と情熱と理解を持っているか、という問題もあります。彼らから映画の話聞いたとしても、B級映画の話などは出てこない。そういう、つもの、下々の者が見るもの、と、言われたら、それで、おしまい、英語が使える、と、自体は便利だけれど、話に深さが、出てこない。その便利さを、我々はいかに批判的に、見ていくか、ということが重要だ。

小松 英語ができる、人が中心になつて、いふ、と、どうして、日本の立場が弱くなる、と、いふ、と、も、あります。アジア国際公益団体会議(CAFO)と、アジアのNGO、NPO、や、助成団体のネットワークを、日本が主導して、作つて、ま、したが、元氣な国は、フィリピン、や、シンガポール、で、いちばん、影が薄いの、が、日本、なんです。構成の面から、他、の、国、の、NGOは、自分の、面、の、いろ

な問題について活動している団体なのに対して、日本のNGOは国際的な活動に助成する財団のような組織が中心なので、視点にかなりのズレがある。日本からも国内の問題に取り組んでいるNGOを出したいんですが、今度、は言語の問題で、目が外に向いていない。結局、どうも日本は、アジアの中で、浮いている、んじゃないか、という、危機感をもつて、帰つてくる、ことが、よく、あります。

石井 この「インターネット」での「コミュニケーション」が活発ですが、インターネットが「メール」は、僕らが、今まで、知らなかつた、言語世界です。ね、つまり、話し言葉と書き言葉の中間なんです。アノマスなので、無責任な発言が出る危険性はありますが、同時に大きな可能性を秘めていると思つてます。今、生徒と「ミニゲーム」を、とる、ための、学長、メール、と、三つ、をやつて、います。最初は、三千人の生徒が、いせいに、送つて、きたら、回線が、パンク、しちゃつと、心配したのですが、始めた、ら、一日、一本、くらい、しか、来ないんです。笑。そして、来た、メール、は、うちの、食堂、は、おいしい、けれど、もち、ちよつと、高い。サイゼリヤと、比、べて、五十、円、も、高い、のは、なぜ、か、と、いふ、と、極めて、真面目、で、きちん、と、した、言葉、遣い、なんです。しかし、学生が、自由、に、やつて、いる、サイト、は、どう、いふ、あんな、ます、すい、の、にあんな、高い、のは、あかん、だ、め、だ、と、いふ、た、調子、で、キャン、キャン、やつて、いる、んです。匿名、だから、八、チャ、メ、チャ、なんです。それを、読む、と、学生、の、二、丁、入、は、ま、つた、と、別、の、ところ、にある、のが、よく、わかる。いま、私が、思、つて、いる、その、中間、を、どう、いふ、言語、空間、を、創、わ、ない、か、と、いふ、こと、です。この、方法、を、どう、使、う、か、は、お、金、も、か、から、ない、し、アジア、の人、と、堅、苦、しく、なく、意見、の、交換、が、できる、んじゃない、か。ただ、さ、う、き、話、した、英語、の問題、の、よ、う、に、特、殊、性、を、無、視、して、しま、つ、危、険、性、が、ある、か、も、し、れ、ま、せん、し、か、し、同時、に、そ、こ、に、新、し、い、可、能、性、を、開、発、で、き、な、い、か、と、思、い、ま、す。

タリー映画祭ははつきりと顔があるんです。世界中のドキュメンタリストが矢野和之氏の名前を知っている。スタッフも知っている。毎回行っている「オウー」という感じで人脈が広がる。だからこそ、商業映画はカンヌだけじゃなくて、ドキュメンタリー映画は山形だと言われるまでになっただけです。

石井 ですから、本当の財産にしなければいけないのは人脈なんです。うくなった山本達郎先生が、「学者としての something of something, everything, something of something, everything」といって座標軸を考える必要があると思います。

四方田 九〇年以降、日本に急速にアジアからの人間が来ています。一時は何万人もイラン人がいた。タイの人は新宿のことをリトル・バンコクと呼んでいます。新宿の歌舞伎町のマンションの中にタイのお寺や中国の廟があったりする。そういう人たちは要するに日本の中にいるアジア文化ですよね。現役のカリキヤ一なわけです。でも、その人たちと日本社会との接点がなかなかつかめない。日本ですと生きていくわけだから、金儲けをするだけじゃなく、日本文化や日本人とどうやっていかにかかっているのかも、彼らのリンクができていかなければ、アマテリミックなものとは離れたところまで、せつかくのチャンスなのにもったいないと感じます。

小松 私は逆のことを考えています。例えばタイに住んでいるシネママンなんて、日本人は



1



2



3

三万人もいるといわれています。その奥さんたちのなかには、高学歴で仕事をしていない人たちが多くいます。現地では、博物館のボランティアとして、日本人相手に説明したりするようになることをしている。しかし、いったん日本に帰ると、その人たちのタイ語やタイ文化についての知識というのはあまり役立っていない。それをもっとない。そういう人たちが自由に集まれる場所がある、何か新しいものができるのではないかと気がします。

小松 今日長い時間ありがとうございました。●

四方田 お料理教室でもなんでもやってみてほしいですね。

大橋 一昨年、わたしの関わっているシャムニールという東京のNGOが三十周年を迎えました。創立記念企画として、僕らが、バンタラシユの美容師と呼ばれているバンタラシユの女性民謡歌手を日本に招いてコンサートを開いたんです。彼女の歌の素晴らしさを日本人に知ってもらうことができたと思います。

大橋 アジア域内での交流も進めていっていただきたいですね。例えば、一般的に南アジアは東南アジアに対して優越意識を持っており、一方で欧米に対してはいつも劣等意識を持っている。その点、日本が主催するプログラムによって双方の人が出会う機会ができるんです。タイの人にとってはお経を取りに行くだけだったインドですが、インド人とはこういう人たちなの、という顔が見える関係に変わっていくわけじゃないですか。そういう意味では、アジアセンターが築いてきたアジアに対する見方の重層化をさらに進めていってほしいと思います。

大橋 普通なら出会わないアジア人同士が出会う、お互いのことを知るきっかけになったり、その国同士では絶対に会わないような人たちが互いに対等に話せる場としての日本になってほしいという気持ちがあります。

石井 マシアセンターでは、東南アジアにおける東南アジアについての研究を促進するための「東南アジア研究地域交流プログラム」というのを長年実施してきました。例えば、インドネシアの人がラオス語を勉強するためにラオスに行きたければ助成をする。日本とは関係がありませんが、日本でなければできない事業です。日本は表に出ていなくても、カタリスト、あるいは触媒の役割を果たして場を提供することができたら、素晴らしいと思っただけです。そういう意味でも新しい時代にきているように感じています。

四方田 例えば、アメリカでのシンボジウムだと日本人と韓国人が非常に気軽に話せるというところがありますよね。日本に韓国人を呼ぶと韓国人が緊張してちゃって、韓国に行くとな本人が緊張する。でもアメリカだったら対等になれる。

四方田 例えは、アメリカでのシンボジウムだと日本人と韓国人が非常に気軽に話せると思っ

小松 今日長い時間ありがとうございました。●



6



4



- 1 日本・ASEAN多国籍文化ミッション 第一回会議(1997年度)
- 2 日中韓次世代リーダー・フォーラム(2002年度)
- 3 沖縄国際フォーラム
「歴史的町並み・風土を生かした地域社会の発展」(2000年度)
- 4 アジア現代美術個展シリーズ!
『ヘリドノ 映しだされるインドネシア』(2000年度)
- 5 アジアセンター・ライブラリーで閲覧できるアジア関連の雑誌
- 6 『方力鈞 物語なき時代の人間像』展(1996年度)
- 7 アジア6カ国コラボレーション『リア』公演(1997~1999年度)

7



5

アジアセンター事業略史

過去9年間の主要な主催・共催または支援事業をまとめた年表です。アジアセンターの4つの事業領域とそれを示す記号の対応は、アジア域内の知的交流推進、アジア各国の文化振興支援、日本におけるアジア理解促進、アジア域内の草の根交流推進、となっています。なお、多年度にわたって継続的、断続的に実施してきた事業についてはアジアセンター事業として実施した最初の年度に記載しました。

平成7(1995)年度	<p>アジアセンター開設記念シンポジウム 「アジア相互理解のメッセージ」 アジア・パシフィック・コース・フォーラム (以降継続) 次世代リーダーフェローシップ(以降継続) 東南アジア研究地域交流プログラム (SEASREP)以降継続) 成功のためのネットワークング(～H11) 「持続可能な地域経済成長のための APEC開発協力」 アジア染織アーティスト・グループ研修 フィリピン・ミュージカル 「エル・フィリ2部作 愛と反逆」 アジア漫画展(以降継続) 「爆発するアジアの人口問題」 アジア映画監督シリーズ(～H12) 「リノ・ブロッカ映画祭 前期」 アジア映画史発掘シリーズ(～H8) 「ヘラルト・デ・レオン監督をめぐって」 「アジアのモダニズム その多様な展開」 インドネシア フィリピン タイ展 開高健記念アジア作家講演会シリーズ (以降継続) アンフル・リドワン(マレーシア) アジア理解講座(以降継続)</p>	平成11(1999)年度	<p>アジアの明日を創る知的対話(～H14) 「持続的発展とヒューマン・セキュリティの促進」 日本・モンゴル文化フォーラム(～H12) 「21世紀に向けた新たな文化交流・協力を目指して」 東アジア知的交流機関ワークショップ ベトナム無形文化財映像記録化及び 人材トレーニング機関基礎調査(～H12) 東南アジアにおける歴史文書の保存と 修復に関する国際会議(～H12) インドネシア舞踊公演 「旅する舞人～伝統から現代へ～」 「予兆:アジアの映像芸術」展</p>
平成8(1996)年度	<p>アジア国際公益団体会議(～H13) 「未来へのビジョン」: アジアにおける国際公益団体の協力の可能性」 カンボジアラオス・ベトナム 知的基盤強化支援事業(～H12) ブータン国立博物館支援事業(～H11) アジア地域博物館研修ワークショップ インドネシア現代舞踊公演 「ゴングの響きの彼方より」 中国現代美術展 「方力鈞 物語なき時代の人間像」</p>	平成12(2000)年度	<p>21世紀のアジアを考える日中研究者フォーラム (～H15) 日中「知の対話」(～H14) 中国・アセアン研究機関円卓会議(～H14) アジア無形文化遺産保存振興シンポジウム 「伝統を未来の世界へ」 インド現代演劇「サケータム」公演 アジア現代美術個展シリーズI(～H15) 「ヘリ・ドノ 映しだされるインドネシア」展 アジアINコミック展(～H15) 「私たちはどこへ行くのか?」 2001韓国映画プロジェクト(～H13) アジア映画講座(～H13)字幕翻訳者は語る」 日韓文化交流連絡室ホームページ 「日韓交流通信」開設(～H14)</p>
平成9(1997)年度	<p>沖縄国際フォーラム(以降継続) 「21世紀の知的、文化的国際貢献の可能性」 日本・ASEAN多国籍文化ミッション(～H10) アンコール遺跡保存事業シンポジウム 「クメール様式の建築と美術」 バイオンの修復と今後の課題」 シンポジウム「21世紀における文化展示の 構築をめざして」 アジア6ヶ国コラボレーション「リア」公演(～H11) アジア・フィルム・フェスティバル 97 アジア映画シリーズ(～H14)「モンゴル映画祭」 「東南アジア1997来るべき美術のために」展 シンポジウム「再考:アジア現代美術」</p>	平成13(2001)年度	<p>アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム・ リユニオン会議 アジア・メディア・フォーラム(～H16) 「東南アジアの政治情勢の不安定要因」 日印作家キャラバン(～H15) ベトナム少数民族文化遺産調査・映像記録化 および人材育成プロジェクト(～H15) 「アジア演劇の女形」公演・レクチャー(～H14) 韓国ミュージカル「地下鉄1号線」公演 日韓国民交流年:草の根交流助成事業(～H14)</p>
平成10(1998)年度	<p>核実験後の日印関係セミナー 日本・ASEAN多国籍文化ミッション:総括会合 日本・ASEAN文化対話フォーラム(以降継続) 「危機を超えて 文化からアジアを語る」 南インド古典音楽コンサート シャシャーンク& アンサンブル「悠久の風笛」 インド現代美術展「神話を紡ぐ作家たち」 中国映画撮影所シリーズ 「1930年代の上海映画特集」</p>	平成14(2002)年度	<p>日中韓次世代リーダー・フォーラム(以降継続) アジア・パシフィック・コース・フォーラム リユニオン会議「混乱の時代における 平和の模索 アジア若手リーダーの声」 中国・インド研究機関円卓会議(～H15) 国際共同研究「移民問題再検証プロジェクト」 (～H15) シルクロード国際学術シンポジウム2002 「アンダー・コンストラクション」: アジア美術の新時代」展 「香港映画の黄金時代」 国際シンポジウム2002 「流動するアジア 表象とアイデンティティ」</p>
平成10(1998)年度		平成15(2003)年度	<p>日中韓フォーラム 三次元デジタル画像を活用した アンコール遺跡調査研究事業 南アジア演劇コラボレーション 「挑発の演劇、南アジア」公演・レクチャー 「アウト・ザ・ウィンドウ」展 タイ映画祭2003 東南アジア映画祭2003 アジア草の根交流助成事業(以降継続)</p>



パル・ヴァンナリー・レアク氏の小説

開高健記念

アジア作家講演会シリーズ13

激動の現代史を生きた 女性作家のカンボジア

日本カンボジア外交関係樹立50周年、日本ASEAN交流年である2003年11月、カンボジアで最も活躍している女性作家パル・ヴァンナリー・レアク氏(以下レアク氏)を招聘。同氏は、ポル・ポト政権支配開始後に両親と弟二人が連行されて行方不明となり、自身も集団労働に動員され、集団強制結婚など多くの苦難を体験。しかしめまぐるしく変化する政治体制の中に身を置きながらも、小説を書き、映画のシナリオや歌謡曲の作詞を手がけることで、積極的に社会と関わってきた。日本で行なわれたレアク氏の講演を紹介し、さらに「3年B組金八先生」等の脚本家であり、ボランティアでカンボジア支援を行なう小山内美江子氏との対談をまとめ、カンボジアの「今」を理解する。

パル・ヴァンナリー・レアク氏 講演会

「人や社会に役立つ人間になれ」といつ父の言葉に近づいたために

私はとにかく読むことが好きでした。それがどんな本であろうとも、たとえ化学調味料や「シヨウ」を包んだ紙の切れ端にあるたった一文字、一言であつても、まず読んでから捨てるものでした。

私を讀書好きにしてくれたのは、祖母であるソフトソレバベアックと父のバルウタンでした。私が小学校の二年生のころ父は「スライ・ヘタオバ」という四巻もの本と「カテローク」という十巻もの本を、私が読むようにと持ってきました。そして私が読むと、その話の二つ二つを私に説明させました。祖母は何十冊と、いつ絵本を買ってきてくれ、私は祖母にこれらの本を読んで聞かせました。「スライ・ヘタオバ」というのは哲学的な教育の本で、ハリー語やサンスクリット語の名前を持つ登場人物が出てきます。ですから大人にとつても大変読むのが難しく、また難解なものです。

中学校一年生のころになると、社会に対して何が役に立つ人間になりたいと思うようになりました。そのころ化学や数学や物理の分野の研究者の功績のことを知りました。それと同時に私が読み書きができるようになったころから、よく父が言っていた言葉も思い出しました。それは、我々人間は体一つで生まれて、死んでいく。死ぬときに何かを一緒に持っていける者など誰もいない。死んだあと、自らの墓が人から敬われ

ることなく唾を吐きかけられるような人間になつてはいけない」というものでした。私は父の言葉に違わぬような人間、つまり人や社会に役に立つ人間になりたいと思うようになりました。でも、まだ若かつたので、そのような大きな仕事ができるのかどうかわかりませんでした。それで、とりあえず小説でも書こうかと思つたのです。

初めて書いた小説は一九六八年、十四歳のときでした。中学校六年生も終わりのころでした。小説のタイトルは、「恋はどこと」というものでした。この小説を書いたのは、恋愛は勉強に非常な差し障りになると考えたからです。その話は、私の叔父の本当の話をもとに書きました。叔父は私の友人のお姉さんに恋していたのです。初めて小説を書くにあたり、私は非常に困難に直面しました。というのは登場人物の恋愛の場面になると、どのように書いてよいかわからなかつたからです。当時私はまだ若い女性でしたし、カンボジアという国はそのような年齢の女性に対してかなり厳しい伝統習慣を持つておりました。直接、叔父に経験を聞けばよかったのですが、私は女です。叔父は男ですから、恋愛のことを口にするなどできませんでした。ですから恋愛について書くのは容易ではなかつたのです。それに私自身も恋愛をまだ経験したことはありませんでした。すいぶんいろいろ考え悩みましたが、あるとき他の作家の小説を読んで、真似ればよいことに気がついたので、そうして私はその初め

ての小説を書き終えることができた。その作品を国語の先生に渡し、先生から意見をいただいた」と思いました。先生は、私がかんがな素晴らしいアイデアをたくさん持っていて、将来作家になることができるだろう」とおっしゃいました。私は先生の言葉を非常に嬉しく思いました。

一九七五年、民主カンボジアの政権（ポルポト政権）になって、国のあらゆる機関が失われました。この政権下では、読むための本はなく、学校に行くこともできませんでした。ポルポトのオンカー（ポルポトが中心となつた当時の政府の執行部）は人々を二つの階級に分けました。

「旧人民」と「新人民」です。「旧人民」とはポルポトらが以前から解放していた地区に住んでいた人々で、「新人民」とは都市から避難してきた人々です。この「新人民」のことを彼らは、反動的な垢の「ひりついた者」とあるいは、革命の敵「だつみなし者」と呼んでいました。オンカーは旧人民が持っているような生活の権利を与えませんでした。新人民たちは常にオンカーから監視され、批判されました。私たち家族も新人民だとされました。あの時代、カンボジア人はみな夜も昼も奴隷のように働かされました。マリファ、下痢、むくみなどに苦しみました。お腹いっぱい食べたいけれどもありませんでした。スープにも魚や肉が入っていることはありませんでした。水と葉っぱだけの栄養のないものでした。飢えのため死ぬ者もいました。

一九七九年一月七日以降、ベトナムの占領によりポルポト政権は崩壊し、カンボジアはそれまでの中国寄りの共産主義から、ソ連、ベトナム寄りの共産主義の国となりました。そのころ、政府は本を書くことについて完全な自由を与えていたわけではありませんでした。マルクス・レーニン主義に従つて国家と党の方針に沿つていなければなりません。出版するものはすべて文化省が宣伝教育委員会の検閲を受けなければなりませんでした。

一九八四年ころ、私は国家公務員でしたが、小説も書きはじめていました。私が書いていた小説というのはみな、闇で書いていたもので、それは国家と党の方針に沿わないものでした。私は名前を隠して書きました。私は決してよい公務員ではなかったのです。私は書くことのためにさまざまなものをあきらめました。書くことだけは決してあきらめませんでした。

そのころ、私はある男性の妻でもあり、三人の子どもの母親でもありました。一人目は五歳、二人目は三歳、三人目の子どもはお腹にいて出産日も近かったです。私は公務員でしたが、その給料だけでは充分に食べていくことはできませんでした。ポルポト時代に強制結婚させられた夫は、安定した職業を持たず、家計の足しになるようなことは何一つしていませんでした。夫、私の妹、二人の子ども、そして私の五人でおかすはゆで卵二つしかないこともありました。夫はいろいろな問題を引き起こしました。家の中で賭け事をして

ていました。賭け事は当時の政府では厳しく禁じられていました。また私が物書きをするのが気に入らないようでした。そのころでじつと喧嘩になりました。私は簡単に涙を流さない人間ですが、さすがに書き溜めた作品を目の前で夫に燃やされたときには涙が出ました。しかし夫がどんなひどい言葉で私を罵ろうと、私は涙ひとつ流さず、言い返しませんでした。ひどい言葉で夫が私を罵るのは間違っている、だから私は夫と同じ間違いは犯してはいけないのだ、と考えたからです。

夫からどんなに妨害されようとしても、私は書くことに対する努力をやめませんでした。夫の行為は、私に吹きつける嵐なのだ、その嵐もいつかは通り過ぎるのだ、と考えるようにしました。でも、人間の我慢にも限界があります。あるとき、とつとつ我慢できなくなり、私は夫と離婚することを決意しました。離婚すること、自分の子どもたちを父親のいない子にしてしまう、という間違いを犯すことになりました。でも離婚については、もう十年近く考えてきました。離婚された女、と人から言われるのではない、か、三人の子どもが父親を失えば、子どもに芯の強さがなくなってしまうのではない、か、子どもにいい将来を保証できるように誓う、ということができないのではない、か、子どもたちに対して充分な時間をとることができないのではない、か、などいろいろな不安がありました。でも夫に離婚を切り出したのです。離婚を決意した一番の理由は、両親が喧嘩している様子を頻りに見たり聞いたりするのは、子どもにとつてよくないと考えたからです。両親が喧嘩しているような状況の中で暮らすより、父親のいない子どもになつたほうがまだましだろうと考えたのです。私も自分自身が妻としての役割を果たさず、多くの時間を公務員の仕事と創作活動に費やしていたという点では、よくなかつたといつことはわかつていました。でもそれを変えることはできませんでした。私は書くことが好きでしたし、何をもちしてもこの決心を変えることはできませんでした。

公務員として働く女が三人の子どもを抱えて生活するのは容易なことではありませんでした。作品を書くだけで生活することは望めそうもありませんでした。カンボジアでは、書くことだけで余裕のある暮らしをすることはできません。ですから私の生活状況も一向によくならず、一銭も家になどときもありませんでした。

「あまりにも哀れな」
(45分のビデオ映画、2003年制作。カンボジアの保健省とエイズ国家対策センターの協力を得て、アジア開発銀行貧困削減日本基金による「エイズ防止のためのコミュニティの活動支援プロジェクト」として実施。カンボジア国営テレビ放送、プノンペン市テレビ放送などで複数回放映)
脚本：バル・ヴァンナリーアック
監督：セイン・セター
主演：ジョン・ソワンダー、プリアブ・ソチアター、ソイ・セライレアック

子どもを学校に行かせるお金がないときもありました。それでも書くことをやめることはしませんでした。そして現在まで書きつづけるに手をたのびます。

これまで給料がよい民間の援助団体から転職の誘いがあつても、その申し出を断つたこともありません。書くことをやめなければならぬような仕事にはつけないからです。給料がいくらよくても、創作活動に関係のない仕事であれば、その仕事は受けるに相応しくないと考えています。現在でも私は貧しいままなのですが、それでも書くことに喜びを感じています。作家としての職業以外何も望んでいません。今、私は作家で誰も私を妨害することなく名前を隠す必要も、顔を隠す必要もありません。私は確かに父の言つた言葉に近いところを歩いてきていると思います。ただ父がそれを今実際に見ることができないことだけが、本当に残念です。

残念です。

スオンは、比較的暮らし向きのよい農民で、妻と子ども三人とともに幸せに暮らしていた。ある日、プノンベンに行つて軽い気持ちで買春をし、エイズに感染してしまう。何も知らない妻とお腹の子どもにも感染する。スオンと妻は病気ののために仕事ができなくなり、村人からも軽蔑されるようになる。家も田畑も売り尽くし、とうとう長女のソビーをプノンベンに出稼ぎにやることにする。だがソビーは悪い仲介人に騙されて売春を強要され、ソビーもエイズに感染する。働けなくなったソビーは店から追い出され、やつとの思いで生まれ故郷の村にたどり着く。両親はすでに亡くなつていて、エイズに関する教育を受け、深い理解を持つようになった村人に迎えられ、ソビーは兄弟とともに寺院であたたかく保護されるのであった。



小山内氏が代表をつとめる「JHP・学校をつくる会」の活動より。左:カンボジアの小学校でマーチングバンドを指導する日本マーチングバンド指導者協会の原田理事長/右:小学校でプランコを作るボランティア

対談 「生きるために書くこと、 書くために生きること」

小山内 美江子(脚本家) × パル・ヴァンナリーレアク(作家)

通訳:岡田 知子(東京外国語大学助教授)

「世界共通のテーマ
3年B組金八先生」

レアク 先日、小山内先生が脚本を書かれた「3年B組金八先生」のビデオを見ました。生徒のこころ、両親のこころ、教師のこころがうまく描かれていて、実に感動しました。舞台は日本ですが、教育をテーマにした内容はどの世界にも通じますね。それにしても金八先生のキャラクターは素晴らしい。理想を高く掲げた登場人物の設定にも賛成です。

同じ脚本家としても、先生の書かれたドラマから学ぶところが多くありました。父親が子どもを愛するがゆえにやっている行為が子どもには通じない。通じないところが逆に邪魔者扱いをされてしまふ。私はそのシーンで涙が出ました。私の息子二人も中学に入った頃、朝家から登校したものの、学校には行っていないということがしばしば続き、子どもへの教育には随分悩まされました。もうその二人も大学生と社会人になりましたが。

それから、金八先生がお酒に酔ったとき、不良少年たちに囲まれて暴力に遭うシーン。警察の人が発砲したことで新聞沙汰になる。最初は些細な出来事だったのに、周りの人や地域を巻き込むような事件になるという話の展開に感心しました。

小山内 とてもありがたうございます。レアク 「自殺します」と言って飛び出した女子生徒が最後に学校に連れ戻されて両親に会った時に、

「私のこころなんて、どうなるのかなとわからないんだと思ってた」と告白すると両親は、あなたのことを好きだったのよ」と言いますが、私はここでまた涙が出ました。カンボジア人の私が見ても大変面白いドラマです。ぜひカンボジアでカンボジア語の吹き替えにして放送するのよと思います。カンボジアでは日本のテレビ番組と言えば、「おしん」と子ども向けのアニメくらいしかありませんから、ところで、日本人は、教育問題を扱ったドラマに興味があるんでしょうか。それとも恋愛ドラマが好きなんですか？

小山内 いろいろなものが好きですね。教育問題と言ってもさまざまジャンルがあって、学校を舞台にした恋愛ものもあるし、スポーツ根性ものもある。「金八先生」はその中でも少し特殊で、学校だけでなく、それを取り巻く社会までを反映しています。表面的に書いてしまえば簡単ですが、社会性にまで突っ込むのは結構大変なんです。「金八先生」を書きはじめて二十四年前には、中学校をテーマにした番組はそれほどなかったもので、中学三年生がその親と一緒に見られる番組を作りたかったのです。親と子が一緒に見られる番組はほとんどありません。NHKの大河ドラマですら別々ですからね。親子が一緒に見て感想を話し合えるような番組にしたいかったです。レアク 二十四年間も書きつづけていると、テーマ探しが大変だと思います。取材はどのようにするんですか？



おさない みえこ
小山内 美江子

横浜市生まれ。1962年にTBSテレビ「キイハンター」でシナリオライターとしてデビュー。NHKテレビ小説「マー姉ちゃん」で人気を得、以後「3年B組金八先生」(TBS)や「親と子の誤算」「父母の誤算」などで教育・家庭問題を取り上げて話題を呼んだ。他に、「翔ぶが如く」「徳川家康」(NHK)などがある。またボランティア活動にも力を注ぎ、1990年、湾岸危機に揺れるヨルダンの難民キャンプへ行き、救援ボランティアに参加。1991年、日本国際救援行動委員会設立に参加。その後、1993年に「カンボジアの子どもに学校をつくる会」を俳優の二谷英明氏らとともに立ち上げ、代表をつとめる。主な著書に、『金ハシリーズ全14巻』『ヨルダン難民救援への旅』『カンボジアから大震災神戸へ』『メコンに輝け桜小学校』他多数。

バル・ヴァンナリーレアク

1954年、カンボジアのコンボン・チナン州生まれ。父は軍人、母はシンワット王の曾孫。1975年4月のポル・ポト政権支配開始直後に両親・弟二人が連行され、行方不明となる。自身も、集団労働に動員され、集団結婚や祖母の死などの幾多の苦難を経験する。同政権崩壊後、プノンペンに移り、区役所に勤務して、住民統計や識字教育にたずさわりながら、貸本屋のための小説を執筆し、家計を支える。家庭内暴力に苦しみながら、3人の子どもを育てる。1989年、プノンペン市文学コンクールで『闇は去った』が第1位、『希望の地平線』が第2位を受賞。『闇は去った』は当時異例の5000部が出版され、ラジオドラマおよびテレビドラマ化されるなど大好評を博す。1995年、長編『忘れ得ず』でシハヌーク国王文学賞受賞。同時に、シナリオ作家としても、数多くのビデオ映画・テレビドラマ作品を執筆。また、カエウ・ベッチダーなど人気歌手のために歌謡曲の歌詞も書く。最近の作品に長編小説『真夜中を過ぎて』、詩集『クメールの月』など。女性・青少年のさまざまな問題を扱うNGOの啓発ビデオ制作に協力するなど、社会的な活動にも力を入れている。



小山内 もちろん自分の足で歩いて集めます。性同一性障害を扱ったときは本当に難しかったですね。でも一本でも、質が落ちたなんて思われたくないですから、プロは、よい作品を単発で書くだけではだめなんです。コンスタントに書きつづけたいと。

レアク 「金八先生」は毎年書いているのですか

小山内 二年か三年おきです。カンボジアに行かなきゃいけないですから(笑)。しかし脚本を書くことになったら、覚悟がいりますね。途中で死にたくなるくらい、フィクションがあるしね。体調が悪いときもあるけど、だからといって書けないとスタッフに迷惑がかかるから、休むわけにはいかない。一本書くのには一週間かかる。一シリーズが二十本以上で、これまでパート六まで続いていて、その間に二時間ものスベシヤルも書いてきたから、これまで書いた、金八先生「は全部で百三十本くらいになりますね。

レアク たしかに暴走族とか不良少年グループはカンボジアの

プノンペンでも見られる現象ですし、「金八先生」のストーリーと同じような状況も実際に起きています。

カンボジアで深刻なエイズ問題

小山内 レアクさんのエイズ予防キャンペーンのビデオ、あまりにも哀れな(注:あらすじはP10参照)を拝見しましたが、とてもよくできていると思います。女の子が売春婦として売られて帰ってきて、普通はエイズの感染が怖くて村に入れられないじゃないですか。でも、村では既に、エイズはうつらない」というキャンペーンをやっている村人に知識があるから、その子を受け入れる、現実にはなかなかあんな風にはいかないけれども、ストーリーがよくまとまっていてよかったです。最後にみんなが受け入れられるというエンディングもね。

レアク カンボジアには、キリスト教系NGOの病院があり、エイズ患者を受け入れています。「ポル・ポト(ポト)」「二つの命」ともしび」というNGOですが、休みの日には、患者をトラックに乗せて遊びに連れていったり、お料理を作ったりします。従来エイズに関しては、キリスト教系の団体が活発に活動していましたが、風習や考え方の違いによってうまく浸透しないこともあり、やはり、仏教を通して活動したほうがいいのではないかと、という政府の

判断がありました。現在は保健省を通してプノンペンの仏教研究所で、まずお坊さんたちを教育し、各地方の寺院に広めていく事業が進められているようです。

小山内 タイでも、ロフリという寺のお坊さんが、末期のエイズ患者を受け入れていて、世界各国からの基金によって運営されています。タイでは、売買取における感染は一九九一年より九六年のほうが減りましたが、レアクさんのビデオにもあったように、家庭内感染が問題になってきています。九六年当時、エイズと言えばタイでしたが、カンボジアがタイを追い抜くのは時間の問題で、早くこれに気づいてほしいと、そのお坊さんは言っていました。

レアク 感染者の割合はカンボジアのほうが高いと思いますね。エイズの拡がり方もカンボジアのほうが早かったと思います。というのも、性産業に従事するカンボジアの女性は字が読めないため、エイズに関する知識がないことがあげられます。

小山内 字が読めない人々が、多量にいます。だから、テレビドラマでの啓発が大切なんでしょうね。

カンボジア版「金八先生」の登場

小山内 今回レアクさんは熊本でも講演される予定ですが、熊本の芦北町には、カンボジアのタケオの先生が現在一人滞在してい

ます。芦北町では毎年、カンボジアの先生を受け入れていただいています。これまでフロンペンから二人、コンボンチャム、タクオなどから各一人。毎年一人ずつ呼んで今年で五年目になりました。滞在中のプログラムは、小学校に三カ月通い、小学生と同じ教室で学びます。その後、中学校ややはり三カ月、同じ教室で音楽も体育も一緒に学びます。

レアク いいプログラムですねやはり、日本での授業はカンボジアのものと違っただけですから実際に生徒の側から授業を見て参加することができるのは本当にいいですね。

小山内 このプログラムでカンボジアの先生を受け入れた芦北町の学校の子ともたちの呼びかけで、町の人から寄付が集まり、カンボジアにすでに三校が建設されました。それにカンボジア版金八先生も育っています(笑)。カンボジアの師範学校で音楽の授業をとった先生が卒業して赴任するとき、一人に五十台ずつピアノ一万をプレゼントしたのです。赴任先である小学校へ行き、そこで五十人の生徒が演奏できます。音楽は言葉の壁がないからいいのです。

そして最近、フロンペンで小学生を対象にした「フロンペンさくらバンド」というマーチングバンドを作りました。日本マーチングバンド指導者協会会長にも特訓していただき、何かイベントがあったときに演奏を依頼されるくらいい

の力をつけてきたんです。今度せしも「」があるときにお知らせしますから、一度レアクさんも見てください。ソーラン節のコンセルもやりますよ(笑)。

レアク 楽しそうですね。これは写真を見ながらおそろいのユニフォームを着ていて、とても素敵ですね。

カンボジア人のために日本人が行ってくださるのに、カンボジア人の私が行かないわけにはいきませぬ(笑)。私は貧しいのでお金を出して学校を建てることはできませんが人を励ましたり、イベントに参加することはできます。

小山内 こういつく風にカンボジアにも金八先生が生まれていまして、ぜひ「こいつ」の事実をもとにドラマを考えたいです。

レアク 実際に話を聞いてぜひ書きたいです。
書きたいことを
書くための基礎固め

小山内 失礼ですが、今おいくつ?

レアク 四十九歳です。

小山内 そう、私は四十九歳から「金八」を書きはじめました(笑)。



レアク 四十九歳の今、小山内先生にお会いして、「金八先生」のお話をお聞きするとは、とても深い縁があるような気がします。

私も今、ある構想を持っていました。実際にそれが作品になるかどうかはまだわかりませんが……。

小山内 書いても金にならないうときもありますが、それでも書いておくことが大切です。

レアク カンボジアでは衛星放送やケーブルテレビで中国や香港、タイのテレビ番組や映画などが入ってくるので、それを吹き替えて放送したほうが安いのです。ですからまたまたカンボジア人が作ったものはかりを放送するところまではいきませぬ。

小山内 でも、状況は変わるでしょう。放送できるようになったとき、よいものを書く技術を、それも女性が持っているというところは素晴らしいことですよ。

レアク 「これまで三人の子どもを養わなければいけないので、お金をもらつたために仕事をしてきました。今は子どもも大きくなり、そろそろ養育の義務から解放されそうです。

小山内 私も母が亡くなってから、ヨルダンやカンボジアに行けるようにならなりました。家庭の心配がなくなつたとき、本当に自分のやりたいものができるわけだから、レアク 他人のゴーストライターをやつたこともありません。お金欲しさに、やりたくない仕事もすいぶん引き受けました。そついで

つことに時間を取られるのは不本意ですが。

小山内 いいえ、そついでをしながら、技術を身に付けていくのですよ。私が書いてきた作品の「一覧を見ると、NHKの幼稚園番組からウルトラの『フレイカール』……」これだけ書いてきたことに自分でも驚いています。それに企画がボツになることもあるわけですが、でも、私も子どもを育てていた、親もいたから、文字にしたものは絶対にお金にしてやるって気迫を持ってやってきました。

育てる、食べる、一杯でしたが、それでも、やがては自分が思う番組が書けるようになつてほしいなと思っていました。それができるようになつたのが「金八先生」で、今のあなたと同じ年齢のときです。それから、やはりたくないなと思う仕事はやっていませぬ。その代わりにカンボジアに行つちゃう(笑)。

レアク 私も一九九〇年からは書く仕事だけで子どもを育て、毎日食べてきたので、あつちやることはよくわかります。小山内さん、よつても有名な方だ、伺っていますので、今日、こんなに楽しくお話できて本当に良かったです。と、思っています。

小山内 有名、無名とがそついでとは関係ないのね、人と仲よくできないと本は書けない。レアク 本当にそついですね、ありがたうございました。

二〇〇三年十一月対談

茶は「アジア発の世界飲料」であるが、アジアに起源を持つ茶が「世界の飲み物」となるまでに、オランダとイギリスが果たした役割は大きい。茶がヨーロッパの文献にしばしば登場しはじめるのは16世紀。17世紀にはオランダによる輸入が始まる。そして18世紀になるとイギリスで驚異的に消費を伸ばし、百年の間に「国民生活の必需品」と呼ばれるほどに普及する。実際ヨーロッパの人々は、アジアの茶文化をどのようにとらえていたのだろうか。古い絵画や文献などから、茶をめぐるアジアとヨーロッパの交流の歴史をひもとき、茶を媒介としてヨーロッパがアジアをどう理解したかをさぐる。

2003年度第2期「アジアの茶文化をさぐる」 茶文化に見る アジアとヨーロッパの交流

滝口 明子（東京外国語大学非常勤講師）

2003年度第2期のアジア理解講座では、「チベットを知ろう』『市民社会』 その構図からアジアの何が見えるか』『アジアの茶文化をさぐる』の3講座を開講した。「アジアの茶文化をさぐる」では、中国雲南省で生まれた茶の歴史、文化、習慣など多方面から茶を紹介。全講義のうち、滝口明子氏による講義の一部を紹介する。

広大な地域で知恵があり、豊かで、すべての面で幸せな人々が住んでいる。日本については、食べ物や質素で飲み物はもっぱら茶を飲むという記述があります。一五八五年ころは天正少年遣欧使節がヨーロッパに行き、日本に関心を持つ人が多かった時期です。また三十余年間日本に滞在したイエズス会士、ルイス・フロイス（一五三二—一五九七）の『日欧風習対照覚書』にも、ヨーロッパの女性が聖女の名前をつけるのに対し、日本では、鶴、亀、茶などという名をつける」とか、ヨーロッパでは冷たい飲み物を好むが、日本人は熱湯に粉末にした茶を入れてかき混ぜて飲む「茶筴で泡立てて飲む」などの記述があります。

アルコールではない
飲み物として流行

このように、中国人や日本人がチャというものを飲んでいるらしいということが、かなり本に書かれているのですが、十七世紀に入ると、オランダ人によって実物の輸入が始まります。お茶を運んだ船はまず日本の平戸を出発し、中国から運ばれてきたお茶も途中で積み込んで、一六一〇年にオランダに帰ったとされています。お茶を輸入した理由の一つに、中国の陶磁器に対する関心がありました。オランダ以前にアジアの海で勢力のあったポルトガルには、中国や日本の焼き物がかなり持

イエズス会宣教師から
もたらされたアジアの情報

お茶は通常、発酵の程度で分類され、不発酵の緑茶、半発酵のウーロン茶、完全発酵の紅茶の三種類に分けられます。一方、十八世紀ごろのヨーロッパの文献によく現れるのは、緑茶、ポーク茶、紅茶という分類法です。ポークとは中国の武夷山に由来するというのが定説で、緑茶ではないものを総括した名称です。実は紅茶がいつごろから出て出てきたのかは、はっきりとわかっていません。十八世紀中ごろに中国の星村の付近で、黒色紅湯のお茶が取れ

た記録があるので、それがヨーロッパに渡ったのかもしれない。中国や日本では、紅茶に「紅」の字を使いますが、英語ではブラックティーとなり、文献にも色の古い文献では、緑茶とポーク茶という分け方が中心です。運ばれるときに赤道など暑いところを通ったから緑茶が発酵して紅茶になった、という説はないと考えます。というのも、中国茶の製法が

ら考えると、一度発酵を止めた茶が紅茶に変化することは科学的にあり得ないので、ただお茶の製法が不完全だったり、品質が劣化しやすかったのかもしれない

せん。茶という言葉の語源からすると茶色ですが、それがどんな茶色だったのかも、不明です。

古代ギリシャやローマ帝国の時代、アジアはシルクの国（中国）、スパイスの国（インド）やインドネシア）として知られており、これがヨーロッパのアジア理解の原点と言えます。古くからシルクロードはありましたが、ティーロードはまだなく、大航海時代に海の道ができて、十七世紀になると本格的にお茶がヨーロッパに運ばれるようになります。十六世紀、イエズス会の宣教師たちが中国や日本に来て、ヨーロッパに情報をもたらしました。中国は明、日本は織田信長

や豊臣秀吉の時代です。一五七三年にナボリで世界地誌の本を出した学者のアナーラ（一五四五？—一六〇七？）は、友人の薬師の家にはシナモンやクローブやチャム茶など、アジアの珍しい物産がある」と書いています。お茶はまだ輸入されていない時期ですが、スパイス類と一緒に運ばれ、少しは飲まれたかもしれませんが、また口マで出版されたポテロ（一五四四—一六一七）の本はラテン語やドイツ語、スペイン語、英語などに訳され、百年間くわい世界地理の教科書として広く読まれました。その中に、アジアについて、世界で最も高貴で

ち込まれていて貴族たちがアジアの陶磁器を楽しんでいたのです。そして中国が混乱した明の末から清の初めの時期は、日本の伊万里(有田窯)に注文が殺到しました。ヨーロッパには当時「コリアヤ」も入っていたので「コリアヤ」を飲むための手「コリアヤ」も日本に発注されました。また受け皿とカップと「コリアヤ」もすでに作られていたようです。

イギリスでお茶が急速に普及するのは十八世紀です。イギリスでは一六五〇年代にすでに「コリアヤ」が登場しており、五十年後にはロンドンだけで何百万軒ともいわれるほど増えます。お茶や「コリアヤ」など、酒ではない飲み物を飲ませる店として流行り、入場料を払うと長時間居座って新聞も読める場所だったようです。「このころはお茶に集う家族の肖像画も多く、一七三〇年代には「パーティー」でお茶を出す様子がさまざまに描かれています。十八世紀中ごろにはロンドンの職人たちがお茶を楽しんでいる絵も登場しますから、百年間で急速に普及したことがわかります。

いながら、いつも片手にトースト、片手にカップを持って登場する帽子屋さんが描かれています。また小野二郎の「紅茶を受皿で」という本によれば「カップから受け皿に紅茶をこぼして冷まし、受け皿に口をつけて飲むことがよい習慣として残っている地域もあつたようです。」

いつとて、貴族や身分の高い聖職者に人気がありました。ルイ十四世の時代にも、シヤムタイの大使から「シヤム」送られた金の「イボ」の話が出てきます。宮廷の侍医「ドクト」(一六四六-七二二)は「日本と中国のお茶の比較や、飲み方の習慣について書いています。」

が生産できなかったのです。国民が輸入品であるお茶を飲んでいたのです。「シヤム」は、王侯貴族から庶民に至るまで、アジア産の小「シヤム」に屈服した」と書いています。また、中国人も日本人も一年以上保存した茶しか飲まないとか、お茶の「シヤム」で「シヤム」茶の文化の「シヤム」中国では茶は労働者の一般的な飲み物であること、日本では「シヤム」茶を先生について習うことなど、茶の文化について触れています。この本の第二部

版された本で、お茶を長年扱ってきた「シヤム」の商人「シヤム」の本に、緑茶と「シヤム」茶と「シヤム」茶のことが出てきます。「シヤム」茶は効果が強すぎるので、緑茶と「シヤム」茶を混ぜて飲むと「シヤム」茶といわれます。日本人には、緑茶と発酵した紅茶を混ぜて飲むことは想像できませんが、そういう飲み方が一般的だったのかも知れません。イギリスの「シヤム」(一八五七-一九〇三)の「シヤム」(一八五七-一九〇三)の「シヤム」の時間は何か神聖なものだと書かれてあります。他の小説にも、お茶に、儀式や宗教に通じるような神聖なものを感ずるといふ記述が見られます。中国や日本でも、お茶は禅など宗教とも深く関わっていますから、お茶にまつわる神聖な時間といつのは、アジアと「シヤム」の茶の文化に共通するものだとはいえるでしょう。

次にお茶に関する文献を拾ってみましょう。十七世紀のオランダの医者「ボネター」(一六四七-一六八五)は「お茶を、最もすぐれた薬草」と絶賛した著名な人です。オランダからお茶を輸入していたフランスでも、健康によいと

十八世紀のイギリス人医師「ジョン・クレイ・レットサム」(一七四四-一八一五)の「茶の博物誌」には、「茶の木を手に入れるためならどんな苦勞や出費も惜しまない紳士を私は何人も知っているが、彼らのいかなる努力も実を結ばなかった」とあり、当時のイギリス人は、お茶の木の移植を切望していたようです。イギリスでお茶

十九世紀の「アヘン」戦争後に出版された本で、お茶を長年扱ってきた「シヤム」の商人「シヤム」の本に、緑茶と「シヤム」茶と「シヤム」茶のことが出てきます。「シヤム」茶は効果が強すぎるので、緑茶と「シヤム」茶を混ぜて飲むと「シヤム」茶といわれます。日本人には、緑茶と発酵した紅茶を混ぜて飲むことは想像できませんが、そういう飲み方が一般的だったのかも知れません。イギリスの「シヤム」(一八五七-一九〇三)の「シヤム」(一八五七-一九〇三)の「シヤム」の時間は何か神聖なものだと書かれてあります。他の小説にも、お茶に、儀式や宗教に通じるような神聖なものを感ずるといふ記述が見られます。中国や日本でも、お茶は禅など宗教とも深く関わっていますから、お茶にまつわる神聖な時間といつのは、アジアと「シヤム」の茶の文化に共通するものだとはいえるでしょう。

以上、お茶に関する文献や絵を通して、「シヤム」がアジアをどう見てきたのかを紹介しました。「シヤム」で十七世紀に飲みはじめられたお茶は、十八世紀にイギリスで普及し、十九世紀になると「シヤム」で独特の茶文化が形成されましたが、最初は陶磁器など、目に見えるものを通して、豊かなアジアに対する憧れがあったのです。またお茶の文化を考えると、アジアのそれぞれの地域間の比較も大事だし、「シヤム」の茶文化と比較してもさまざまなお茶柄が見えくると思っています。



ヨーロッパで最初に花を咲かせた茶樹(ジョン・クレイ・レットサム『茶の博物誌』(1772,1799)所収)



次世代リーダーフェローシップ・プログラム 「低就学と貧困の悪循環」を断ち切るために ラオスの教育現場から

アジアセンターが実施している「次世代リーダーフェローシップ・プログラム」は、アジア地域に共通する課題の解決に取り組む次世代の人材を育成し、アジア諸国と日本との知的対話のネットワーク構築に貢献することをめざしている。アジア地域を研究対象とする、大学院生やNGO・NPO活動に従事する若い世代が、このプログラムを通してどのような経験を、そして研究を進めているのか。ラオスで基礎教育の現状と課題を研究する瀧田修一さんに報告してもらおう。

最貧国フオスでの
教育充実の必要性

発展途上国の開発における教育の役割は、開発そのものに対する考え方の変遷にももたらす変化してきました。そして近年の開発目標である、持続可能な開発 (sustainable development)、「人間開発 (human development)」、**「人間開発 (human development)」**においても教育の重要性に対する認識はますます高くなってきています。教育は発展途上国の経済開発のみならず、公衆衛生、人口、環境、ジェンダー、民主化などの多くの問題を解決するための鍵を握っているからです。つまり教育開発注1)は開発の推進における重要な手段でもあり、なおかつそれ自身の達成が開発の目的でもあると言えるのです。

私の研究調査地であるラオス人民民主共和国(以下ラオス)は二〇〇〇年の一人当たりのGDPが約三百ドルと、国連の基準では世界の最貧国の一つです。その国境を中国ベトナムカンボジアタイ、ミャンマーと接する内陸国で日本の本州ほどの国土に人口約五百万人が生活しています。政治体制は、一九七五年の革命以来、ラオス人民革命党による一党独裁の社会主義体制が続いています。一九八六年からの改革・開放政策転換による市場経済も導入され、一九九七年には東南アジア諸国連合 (ASEAN)



にも加盟しました。このような流れの中で、ラオスではそれまで整備されていなかった教育分野、特に早急な基礎教育充実の必要性が浮き彫りになりました。その停滞は改善されないうままでありました。二〇〇二年度の教育指標は、初等教育の総就学率が一一一% (純就学率は七六%)、前・後期中等教育の総就学率は、それぞれ四五・八%、二二・六%となつています注2)。

テロや社会主義に阻まれる
現地調査

大学院進学以来、途上国の教育開発について研究を進めていた私は、東南アジアの中でも、その進展が極めて遅れているラオスにおいてフィールド調査を実施すべく、準備を始めました。他の途上国でも手続きの煩雑さは避けられないことと思いましたが、社会主義国であるラオスのそれは私の想像をはるかに超えていました。ラオ

ス研究機関への受け入れの許可申請、長期滞在のためのビザ申請など手紙、電話、FAX等の手段では遅々として進まず、結局自らラオスに飛び、研究機関や官庁を駆け回り、やっとのことラオスに長期滞在する許可を得ることができました。受け入れ先もラオス唯一の総合大学であるラオス国立大学教育学部に決まりました。

私の研究の目的は、(1)現在のラオスの教育状況、特に初等・中等教育レベルの基礎教育分野の普及状況を把握する、(2)基礎教育の普及を妨げている要因を見つけて出す、(3)その要因を取り除くための方策を探る、(4)以上を踏まえたうえで、基礎教育開発のためにラオスが国家として今後取るべき教育開発政策の可能性を探る、以上の四点でした。ラオスは多民族国家であり、また都市部と地方の社会経済格差も非常に大きく、これらの目的を達成するためには、都市部だけでなく山間僻地を含め、できるだけ多くの教育現場を目にする必要があります。そこで、メインの調査地をラオス中心部のヴィエツチャン県、北部ルアンパバーン県、南部サバナケート県、モーンパサック県に置くとともに、時間が許す限り、その他の地域にも足を運ぶことにしました。道路をはじめとする交通インフラの整備が遅れているラオスではフィールド間の移動は容易ではなく、また当時外国人を狙った爆弾テロ事件も多発し



ていたので調査地の決定にも苦心しました。さらに社会主義国であるため、外国人研究者である私は、調査項目ごとに関連機関より許可証を得なくてはならず、そのうえで調査協力者という名のもとに、「行動監視人」を連れていかなくてはなりません。時には中央、県、郡、村それぞれのレベルで監視がついたこともありましたが、こちらが要求するところはできませんでした。

教育に対する啓蒙広報活動の必要性

調査方法としてはラオス教育省、ラオス国立大学の全面的な協力を得て、既述の調査地に関し、小学校児童、中学校の生徒、またそれぞれの学校の教師、その地域で子どもを小学校、中学校に通

学させている保護者、当該年齢で学校に通学していない子どもたちとその保護者等に対し質問紙を用いた徹底したアンケート調査、聞き取り面接調査を通じた定性調査を実施し、それを県レベル郡レベル村レベルへと掘り下げていきました。その後さらに得られた情報をデータ化し、計量分析を用いた定量分析調査を実施しました。

このようなアンケートやインタビューなど小学校、中学校での参与観察を通して、地方における基礎教育の普及状況は、当初の私の予想より数段悪く、それには就学率に代表される「教育の量」の問題だけでなく、「教育の質」にまつわる問題が大きく関わっていることがわかりました。「量」の問題から言えば、学校等の教育インフラの絶対的な不足とそれに拍車をかける学校建設事業の偏在です。これらは教育への公正なアクセスの大きな妨げとなつていきます。また「質」の問題を挙げ

るなら、教科書などの教材の不足、教員数の不足、未整備な教育カリキュラムなどです。これらは高い留年率や中途退学率へとつながり、教育の内部効率性を著しく低下させています。さらに「これら」の問題が、教育の男女間格差、地域間格差、民族間格差へと絡み合い、「低就学と貧困の悪循環」の構図を作り上げていることがわかりました。

財政的な制約もあり多くの難問を一度に解決することは難しいと言わざるを得ません。しかし問題山積の中で、教育行政側がまず取り組むべき課題は、教育を受けることの重要性について啓蒙広報活動を広げていくことでしょう。というのも、特に地方においては、学校へのアクセスの問題以外に、保護者が家庭の労働力でもある児童を就学、通学させることに賛成しないケースが多々見られるからです。短期的な利益に目を向けがちで、長期的視点で教育を受けることの重要性や利点を理解できない保護者、そうした保護者や児童に対し、就学へのインセンティブを高めるような魅力的なカリキュラムや教育内容を提示できない教育行政、双方に変化がない限り根本的な問題解決はできないのではないのでしょうか。

二〇〇三年、ラオス政府は、国家貧困撲滅計画」を策定し、同計画内の教育開発分野では、教育行政と経営」「教育の質・関連

れている当地で目にした子どもたちの笑顔の輝きは、「開発とは？経済発展とは？豊かさとは？幸せとは？」といった命題を私に残してくれました。

(注1)「教育開発」…どうすれば子どもの子どもが学校に行くことができるかを、その途上国政府と一緒に考え、学校建設や教科書作りなど教育の整備や普及に協力し、改善策や計画を立てていくこと。

(注2)「就学率」…学校へ通わなくてはならない年齢の子どもの中で、実際にどのくらいの割合の子どもが学校に通っているかを表す指標。学校に通えなかったり、途中でやめてしまった途上国の就学率は一〇〇%に達しないことが多い。これを純就学率といふ。また途上国では卒業しなくてはならない年齢になつても、欠席が多く勉強についていけず、留年を繰り返すため、小学校に在学している子どもがたくさいる。こうした子どもも数も含めた数値が総就学率で「純就学率」は一〇〇%を超えることが多い。

と村人は勝手に期待してしまつたのですか。

フィールドでの研究を進めていく中で、ラオスにおける教育開発状況の把握という当初の目的は達成されましたが、逆にそれゆえに、そこに浮き上がった問題をいかに改善していくかという解決策の難しさも痛感することになりました。今後も長期的な視野に立つて、多面的にこの問題に取り組んでいくつもりです。また、数字上では経済的に貧困といわ

瀧田 修一

早稲田大学教育学部卒業後、神戸大学大学院で国際協力研究科博士課程。1998年からラオスでの聞き取り調査による初等教育の現状調査を始める。2001年から1年間、ラオス国立大学教育学部の客員研究員となる。その間、援助による小学校建設の視察や援助プロジェクト地選定のための調査なども行なう。現在ラオス教育省研究員としてラオスに滞在中。日本学術振興会特別研究員。



上:京劇の授業風景
 下:ワヤンウォンの指導をするサルドノクスモ氏
 左:生徒に能面をつけるリチャード・エマート教授

アジア演劇研修・研究事業 伝統を再想像する

T.サシタラン (TTRPディレクター)

アジアのさまざまな古典芸能を学び、そこからまったく新しい現代演劇を作り出そうとする取り組みが始まっている。シンガポールの演劇学校のアジア演劇研修・研究事業(The Theater Training and Research Programme、以下TTRP)では、現代演劇の俳優たちが、能や京劇、インドの古典舞踊やインドネシアの仮面劇など、世界的にも水準の高いアジアの伝統芸能を本場の講師から学ぶ。俳優たちは、それぞれの古典芸能の独特な動きや発声方法、リズム、呼吸などを学び、西洋の演劇規範の中で培った現代演劇の手法や技術と融合させて、新しい現代演劇の創出をめざす。アジアセンターが助成する事業の中から、TTRPの設立者の一人であるサシタラン氏にその活動を紹介してもらう。

TTRPがめざす現代演劇
 現代演劇の世界は、砂漠の砂のように絶えず移動し、姿形を変える。地形は数年ごとに変貌し、新しいアイデアや戦略、シヨーンによってリアルなもの、を再構成し、太古の昔からそうであるように、それを新たな観客層に向かって発信しようとする。

演劇は、他のどんな芸術よりも生活のさまざまなあり方と密接につながっており、両者は山から平地へと流れる大河のように枝分かれを繰り返し、やがて深い海で合流する。もし生活と演劇

とのつながりが切断されたらその双方が痛みを被り、やがて衰退の道をたどることになるだろう。実際に、世界の一部の地域で起こっていることであるが、そうなら再生を待たない。

TTRPはそのような生活と芸術の融合を目的としたソロの俳優を対象とする三年間のフルタイム研修プログラムだ。三年前、劇作家の故クオ・パオ・クン氏と、俳優であり批評家でもある私が、シンガポール実践表演芸術学院の後援を得て設立した。

TTRPの第一の目的は、アジアの古典芸能と現代演劇の手法を組み合わせた包括的かつ体系的な研修プログラムを開発し、実施することだが、同時に理論を軽視することなく、意欲的で実践的な手法を重んじている。

その根底には、現代演劇の俳優を真剣に養成しようとするならば、多民族国家だからこそ持つシンガポールの豊かな財産である多様な伝統や文化を活用するべきだ、という考えがある。私たちの最終目標は、シンガポールの伝統と文化を研究し、多民族・多文化社会に深く関わるスタイルやテーマを試してみること、そしていま現在の多文化でグローバルな社会を映し出すような演劇がシンガポールで育っていく下地を作ることである。

TTRPはそのための技術と力量を向上させたいと願う、やる気に満ちた口の俳優のために作る

れた専門性の高い少数精鋭型のプロダムである。アジアには能や京劇、インドの古典舞踊のハフタナリヤム、またインドネシアの仮面劇であるワヤンゴクンといった世界でも最高水準として認められている舞台芸術が存在する。その確立され継承されてきた育成方法が、現代演劇の俳優にとって貴重な財産であるといつのは、TRPPの強い信念である。

長い歴史の中で培われ、体系化された古典芸能の練習方法は、現代演劇の役者にとって大きな意味を持つ。その厳格さと正確な体系と精神性、技術と献身謙虚さと優雅さによつて、現代演劇をかつて到達したことの無い新しい高みへと導くことができる。信じている。

そのためには、一体化した伝統芸能のシステムを分解し、身振り、発声、動き、リズム、呼吸、表現型などの要素だけをいかにして取り入れることができるかが鍵になる。それができればこの要素を再構成して、ロシアのコンスタンティン・スタンニスラフスキー（一八六三—一九三八）が作り上げた俳優養成システムなどの従来の現代演劇俳優訓練方法に、必要に応じて取り入れることができるかも知れない。

TRPPの研修生は三年間の研修期間を終えた時点で、能や京劇、ワヤンゴクンの役者やハフタナリヤムの踊り手になるわけではなく、伝統的なシステムを深く

学んだ経験と、西洋の演劇規範の中で培った現代演劇の手法や技術を、自分なりに組み合わせ使用することが期待されている。

相反する要素を組み合わせる生み出される「調和した不調和」

研修生は、伝統的な手法だけでなく、現代演劇に特徴的な二つの手法にも同時に取り組まなければならない。ひとつはスタンニスラフスキーの演技技術を基本としたもので、俳優が舞台の上で行なう演技は、役の内なる必要性によつて決まり、定義づけられ形作られるといつものだ。内なる必要性」とは、脚本に描かれている役の動機、欲望、性格、経歴、事情、立場、環境などのことである。ひと言でいえば、俳優が役の「真理」を理解し、発見し、それになりきるといふことである。そして見出した「真理」を育み、この真理に沿って生き生きと演じるといふことである。スタンニスラフスキーの手法は非常に信頼性が高く、適用性も高い演技手法であり、また純粋に教育的見地からみても、今日最も効果的な研修方法ではないだろうか。

一方でTRPPでは、研修生が演技の高度な技術を学び理解するうえで、スタンニスラフスキーの起源で認知的・推論的システムの制約から自由になり、それを超えていくために、別の演技アプローチも教えている。つまり、スタンニスラフスキーの主張には反するようだが、外なるものから、内なるものへと進んでいく手法で役の「真実」を解放しようとするもので、俳優の知的・精神的な能力のみならず芸術的・肉体的な衝動をも動員しようとするアプローチである。

「このアプローチによつてシステムではない、俳優は、舞台上では常に心と体が一致した、全体的、「包括的」な存在なのだといつことを学ぶ。それが即興の演技をしたり、脚本の背景を考案したりするのには非常に役立つばかりでなく、リハーサルの初期段階で脚本に初めて目を通すときなどに新しい可能性を開くうえでも有効であることがわかった。

この手法がリハーサルに即興性や活気をもたらす一方で、スタンニスラフスキーの手法は役作りにおいて厳格で実証的な基礎を与え、そしてこの二つの手法のバランスが重要となる。研修生が習得する二つの手法の間には、動き、感受性、意識のせめぎ合いが絶えず生まれるのである。

ロシア、日本、中国と受け継がれた街並み 大連の都市建設

中国東北部遼寧省、遼東半島の先端に位置する大連は、もともと小さな漁村だった。19世紀半ばに、水深の深い不凍港として列強に注目され、日清戦争の際には、日本軍が遼東半島南端を占領。そして三国干渉後の1898年、鉄道建設の利権を獲得したロシア帝国が清朝から大連と旅順を租借し、大連を自由貿易港に、旅順を軍港にした。その後「ダルニー（遠方の都市）」と改名された大連では、ロシア人が指揮をとり、ヨーロッパを模した市街地の建設が急ピッチで進められた。1905年、今度は日露戦争に勝った日本が遼東半島を租借。1945年の日本敗戦まで40年以上にわたり大連を統治し、ロシアが構想した街並みをそのまま継承して市街地を建設した。大連には、こうした歴史を物語るように、現在も欧米風の建築物や街並みが残り、異国情緒が漂う。そして今、この街並みを今後、どのようにしていくか、さまざまな議論が起きている。大連から金壽奉氏のレポートで紹介する。

日本統治時代に受け継がれた欧米風の街づくり

一八九八年、大連を租借した帝政ロシアは商港と商業都市の建設を東清鉄道会社に託した。同社は、その技師長であるザハロフを建設の責任者として、海陸の諸工事に当たらせ、ドイツから二名の建築家を招聘した。この二人は、タル丁の都市計画と建築にドイツ様式を導入し、それが夕

ル丁の都市景観を形成することになり、今もその影響が色濃く残る。タル丁の都市計画の特徴は、パリをモデルにした、広場を中心にして四方八方に街路が放射状に伸びる街路パターンを用いて、市街地を行政市街、ヨーロッパ市街、中国市街の三区域にし、居住者の階級、民族、地区の機能を明確に分けたことである。しかし一九〇四年に日本軍がタル丁を占領した時点では、帝

政ロシアの都市建設は戦争の影響で頓挫した状態にあたり、行政市街のみは市街区として形成されていたが、それ以外は、モスクワ（スキー大）（後の山県通り）以北の地区割りがよくやく施されていたくらいだった。日本が大連の都市建設を始めたのは、一九〇五年五月。帝政ロシアが撤退するに際して、鉄道、水道、発電所、電信などの基礎施設を大量に破壊したため、市街の光

景は惨憺たるものであった。まず、荒れ果てた市街の復興に努め、帝政ロシアのタル丁建設の構想を受け継いで大連の都市建設を始めた。戦争で、帝政ロシアはタル丁市建設の構想のうち、わずしか実現させることができなかったが、その都市計画の雄大ですばらしいこと、日本建設者たちは否応なく魅惑されたことだろうと思う。

ロシアにとってタル丁はウラジオストクに代わる極東支配の拠点と位置づけられており、その都市計画にもそうした意気込みが表われている。こうした計画を踏襲した当時の日本の建設者は、雄大な構想に見合う街づくりをしなければならぬ、と考えていたと思われる。日本の統治者も、国内外から優秀な専門家や学者、技師を招聘してその才能を充分に発揮させた。大広場（現中山広場）を囲む洋風建築がそれ



上から：文化財として保護されている元大連民政署 / 横浜正金銀行大連支店 / 低振動、低騒音、低い床のLRT型路面電車。戦前の路面電車の車台を利用したのも走っている / 満州一と言われた高い格式の満鉄大連ヤマトホテル

を物語る。

日本軍はダルトンを占領した後、「大連市家屋建築取締仮規則」を發布。都市建設にそぐわないバック建築を禁止した。大連の建築は保温、防火および美観という観点から厳しい基準が設けられ、木造建築は許可されなかつた。これは後の大連の都市景観に大きな影響を及ぼした。日本が大連の都市建設を始めた時期に、建築需要を見込んで一攫千金を夢見る多くの建築業者や大工職人が日本内地からやっ

てきた。だが大連の建物は冬の厳寒に耐え得るレンガ造りが主流である。それを知らずに建てられた建物は、欧州風の都市建設の計画にマッチしないとして、全部排除されてしまった。

ヨロバ市街と中国人市街との間にはそれを隔離するかのよう公園建設地が置かれていたが、満鉄(南満州鉄道)が一九〇九年この地に「電気遊園」を造成した。この遊園は高台にあってそこから大連湾や大和尚山が眺望できた。遊園には、当時はまだ

目新しく感じるメリーゴトラウンドボウリング場的が動く射的場、演芸場、図書館、中華料理店、音楽堂などがあり、動物園もあった。遊園全体に多彩なイルミネーションが施され、華やかなものであった。夏目漱石が満鉄総裁の招待で大連を訪れた際に、この遊園に遊んだといわれる。一九〇九年、市内の路面電車が開通した夜

はこの遊園では盛大な提灯行列が行なわれたという。中国人街も近いので、中国の祝日は中国人観光客でかなり賑わった。この

モダンな電気遊園の建設から、気宇広大な都市経営者の描く欧米並みの近代的都市大連への夢がうかがえるのである。

拡大する市街地

さらに一九二一年、満鉄が市街地の西郊、沙河口に車輛工場を建設すると、隣接する土地の市街建設に着手した。道路、溝渠、排水、給水など一切の市街施設を造り、小学校、診療所、郵便局を設置して、商店を誘致し、大連

市街との交通に路面電車を導入した。拡大された市街区では放射状街路ではなく、格子状街路を採用している。これはロシア原計画の街路構成では交通が一点に集中し、交通量が増えれば渋滞の問題が生じる恐れがあるためである。これは現在の市街の実情から見ると、非常に見識の広い考え方であったと思われる。

ダルトン都市計画を受け継いだ大連の都市建設は、着々と進み、やがてロシアが当初予定していた範囲を超えるようになっ

た。急激に増加する人口の勢いに対処するために、一九一九年に新たな市街拡張計画が定められた。この計画では、日本内地に先駆けて用途地域制を導入し、住宅地区、商業地区、工業地区、混合地区の四地区に区分する方針を実施することにした。

一九一〇～一九二〇年代に進められた住宅開発の代表的なものが、市営の南山麓住宅地と老虎灘街道(嶺前地区)沿いの丘陵地の開発である。南山麓住宅地には、一戸建ての高級住宅や満鉄住宅が建ち並び、大連では緑多く最も閑静な住宅地となっている。モダンな洋風の二戸建ての建物が、植え込みや木立のある広い庭に建っている。この自然のままの山麓に建ったモダンな住宅地の町名は、全部草木の名前がつけられている。例えば満州事変を画策したとされる河本大作氏の住宅が楠町と桜町、ドイツ領事館は楓町にあり、現在は両者とも歴史的文化財として保護されている。また、『アカシヤの大連』で有名な清岡卓行氏の住宅が楠町の共栄住宅にあつたことを聞いている。

一九二〇～一九三〇年代にかけては、老虎灘街道の両側の高い丘を開発してほとんど各戸ごとにスタイル趣を異にする洋風一戸建ての住宅が次々と建てられた。その町名も、桜花台、青雲台、光風台、桃源台、臥竜台、秀月台などと、台のついた雅称がつけ

られている。一九二〇年代にアメリカの「ロンドン」ア大学教授が大連を訪問、光風台、桜花台などを視察した際に、それらの住宅を激賞して、当時の「ニューヨークの郊外住宅よりもずっと気の利いた建物であることを指摘し、東京で見た洋館の設計の拙さにも触れたという。そして、こんな立派な家にどんな人が住むのかと尋ね、満鉄の課長クラスの人が多いといつ返事を聞いてびっくりしたような顔をしていたという。

「北方の真珠」と評され、続く街づくり

終戦後、中国の大連市政府が成立し、一九四六年には市街の町名を中国名に改めた。政府は日本人が引き揚げていった後の住宅を、住宅困窮者や住宅のない移民たちに提供した。この措置は政府の資産である「空き家」を保全し、都市景観の保持に役立つ結果となる。

大連市街が大きく変容しはじめたのは、一九七九年の改革开放政策が実施されてからである。

一九八三年十月から経済技術開発区の建設が始まり、一九八四年に総合改革のモデル都市と指定され、外資および技術の導入が拡大され、ひいては遼寧省、東北地区、内モンゴル東部地区の対外開放の窓口となった。

大連市が、都市建設において生態環境保全、投資環境整備、ア

メニヤー社会を重視しだしたのは一九九二年、薄熙来市長が就任してからである。市街地にある「バス」や臨時に作られた小屋を徹底的に撤去し、緑地を改造し、遊休地に公園を造成、大通りに面した建物のクリーニングを要求し、高層ビルをリニアアップするよう指示した。都市の水源を開発し、ダムを拡張して貯水量を増やして給水を保証させ、新築の建物はすべて欧風にし、外観上目障りとなる建物の化粧直しをするのが要求された。さらに電柱の撤去、電線のケーブル化なども進められている。

もちろん、都市建設が必ずしも順調というわけではない。一九九三年、都市の緑化を考え、全市街で繰り広げられた芝生地造りでは、大広場の銀杏、トマヤヤ杉などの大木を残してその他の木は全部伐採したり他に植樹したりし、その跡地に芝生を植えつけた。市長は見通しがよくなったと言

うが市民は木陰がなくなると言う。見識ある市民は「環境保全のためにも、都市には老木が必要だ」と指摘した。のべりと単調な芝生地に対する意見も相次いだため、灌木などを植えたり、彫像を設置したり築山を造ったりした。

広い植え込みや木立の庭と趣豊かな洋風の住宅が並ぶ旧南山麓楓町に、日本人が建築した建物を活用して日本風情街(南山別荘街)を建設しようという話

中山広場を囲む洋風建築一覧

建築名	竣工年	建築様式	現在使用者	設計者
大連民政署	1908	英国風ゴシックルネサンス	万恒商務大厦	前田松韻
横浜正金銀行	1909	ルネサンス	中国銀行大連分行	太田毅
中国銀行大連支店	1909	折衷主義	中信実業銀行	(中国人)
満鉄ヤマトホテル	1914	バロック	大連賓館	太田毅/太田宗太郎
大連市役所	1917	折衷主義	工商銀行大連分行	松室重光
朝鮮銀行大連支店	1918	古典式	工商銀行中山支行	中村与賀平
関東通信局	1924	折衷主義	大連郵便局	松室重光
東洋拓殖ビル	1935	新古典	交通銀行大連分行	宗像圭一

参考資料:

- 『大連』(篠崎嘉郎、大阪屋号書店)
- 『大連四十年』(董志正、遼寧人民出版社)
- 『図説 大連都市物語』(西澤泰彦、河出書房新社)
- 『実録 大連回想8』(鈴木正次、河出書房新社)
- 大連日報、大連晩報
- 『東北アジア近代都市形成史』(戸沼幸市、早稲田大学)



上から:改築がすんだ大連駅南駅舎 / 南山麓楓町にある共栄住宅 / 楠町にある河本大作の旧宅 / 南山麓楓町にできた南山日本風情街、庭がなくなり大きな建物が並び

が持ち上がった。しかし工事を手がけた業者は、旧建築物や庭を全部なくして新規に建て直してしまつた。建築面積を増やす意図によるものだろうが、庭を削って建てた家は、住宅にしては大きすぎ、閑静な住宅地で商店として利用するにも不似合ひで、古い建物を修繕・補強したほうがましだった、という声もある。竣工して二年以上経ったが、入居者はほとんどないらしい。大連の都市再開発において失敗した例といえる。

上野駅を模して建てられた大連駅改造の例を見ると、九〇年代中ごろに提出された案は、旧駅舎を最新式のものに建て替え、プラットフォーム駅前広場を拡張するといったものであつたが、実現するには億単位の資金がかかり、工事中に駅として稼働することでもできず、長いこと柵上げ状態が続いた。しかし一昨年、鉄道の電氣化で駅舎改造が再浮上したとき、市長(李永金)・人民代表専門家、技術者などが数度検討し、市民の意見も聞いて、元来の案と

は全く異なる案が提出された。すなわち、駅舎は歴史的文化財であるので取り壊すことはできない。補強工事を施し駅舎の外観をそのまま保存、現代の建築資材で外観を美化、内部は新築、南駅舎と北駅舎の間を結ぶように鉄道をまたぐ高架待合室をつくる、南駅舎前の広場を改造し、駅前から地下商店街に通じる地下道を建設する、といったものだ。この案では、資金が初めの案の三〇パーセントほどというところで最終的にこちらの案が採択さ

れ、二〇〇二年に工事も無事完成した。

大連市の都市建設は、こうした経験を経ながら、二〇〇〇年江沢民が大連を、北方の真珠」と評したように、中国一美しいガーデン都市をめざして、さまざまな形で進められている。二〇〇三年には胡锦涛首相の新政策として、新たに『東北振興』が提唱されており、大連市も牽引役としての貢献をすることだろう。

金 壽奉

1930年、韓国ソウル出身。37年、小学校入学のため叔父を頼って大連へ移住。大連の国民小中学校で日本の教育を受ける。終戦後、大連電業局で設計・技師として働くかわら、電業局の紅専大学 の中等専門科を修了。折から盛んになってきた中日貿易で日本語のできる人材養成が急務となり、日本語教師に抜擢されて遼寧省政法幹部学校に転勤。その後、さらに大連の遼寧師範大学で本科生や若い日本語教師への教育や日本語のテキスト編集に従事。1990年、定年により退職。大連市在住。

フィリピンのプロバスケットボールリーグ

上杉 啓明 (マニラ事務所)



の競技では不利なはずなのだがやはり米国の影響が色濃く残っているせいである。南米ではサッカーボールで遊び回る子どもたちをあちこちで見かけるといふがフィリピンでは街じゅうのあちこちにバスケットボールのリングが備えられており、そのミニゲームに興じる子どもたちがいる。また大学でもバスケットボールが盛んであり、二大私立大学と言えらるアテネオ・デ・マニラ大学とマニラ・サール大学との試合はかつての早慶戦のように国じゅうの注目を集める。

そのバスケットボールの頂点にあるのが一九七五年に成立したABA (Philippine Basketball Association)と呼ばれるプロリーグである。ABAの選手は日本プロ野球選手のように子どもたちのおごりがある存在である。また上院議員には、映画スター、ニュースキャスターに交じってかつてのバスケットの名選手も名を連ねている。ABAは約三カ月間のリーグ戦が年三回開かれ、すべての試合がテレビ放映されている。現在はAlaska Aces(食品) Coca-Cola Tiger(飲料) Fedex Express(輸送) Ginebra Kings(シシ)などのブルゴール飲料(Purefoods) TJ Hotdog(飲料) Red Bull(飲料) San Miguel Beermen(ビール) Shell Turbo Chargers(石油) Sta. Lucia Realtors(不動産) Talk 'N' Text Phone Pals

(電話・通信)の十チームが加盟している。カブ内はオーナー会社の主な取扱商品)。チーム名には企業名がつけられており、この点はアメリカのNBA(National Basketball Association)よりも日本のプロ野球に近い形態と言える。

さてフィリピンのバスケットボールのレベルはどの程度のものであるのか。二〇〇二年に釜山で行なわれたアジア大会でフィリピンのナショナルチームが日本を敗ったことは日本ではあまり話題にならなかつたがフィリピンでは新聞の一面の記事となつた。結局メタラのかつた準決勝で優勝した韓国に終了間際に逆転シュートを決められて二点差で敗れ、韓国中国、カザフスタンに次ぐ四位という結果に終わったが他のアジア一な種目に比してバスケットボールがそれなりのレベルを保っているのには国内のプロリーグの存在が大きな要因となっているのだ。

先頭ABAのSan Miguel Beermen 対Fedex Expressの試合を観戦した。San Miguelはフィリピンを代表する大企業で、ビールの銘柄として知られている。チケットは三十五(約七十円)と百三十八(約二百六十円)の二種、まだ開幕間もなかつたところでもあり、全体的に客の入りはもうひと足あつたが決勝ラウンドなどの重要な試合になるとチケットの入手は難しくなっている。

もちろんプロの選手であるからいわゆる大男が揃っていたが両チームにひときり身長の高い黒人選手がいる。インポートと呼ばれる彼ら外国人選手はほとんどが本場米国の国籍である。やはり「助っ人」が必要なのである。試合が始まるとSan Miguelの黒人選手がリバウンドを支配し、時にはダンクシュートも決めていく。試合はこの選手の三十五点を挙げる活躍でSan Miguelが一〇五対七十六でFedexを破つた。やはりインポートがチームの最多得点を挙げるケースが多いようである。ちなみにインポートについては各チームごとに出場できる人数をはじめ、NBAの先発メンバーでなかつたこと、身長〇〇フィート以下であること、などのさまざまな制限が設けられているのである。

試合中にも流される音楽DJ調の場内アナウンス、作戦タイム時やハーフタイムに行なわれるチアリーダーのショー、ポイントの投げ入れ子どもたちによるシュートゲーム等々にも、本場NBAの影響が、エンターテインメントの好きなお国柄ながら、観客を喜ばせようとする意欲が感じられた。フィリピンはスペイン、米国による支配が長かつたという歴史のせいか、他の東南アジア諸国には見られない特徴を持っている。スポーツをながめてみてこそそのことを再認識させられる。

フィリピン人が得意なスポーツは「バレー」とよく言われる。ABAとはバスケットボールヒリアードボウリングの三種である。これらのうちの二つがボクシングと入れ替わることもある。特にヒリアードは世界に通用するレベルで、テレビのスポーツチャンネルで放送されている世界大会でフィリピン人選手が活躍する姿を見ることが出来る。ボウリングもアジア大会でメダルを獲得するなど高いレベルを保っている。

一方でサッカーはあまりよくない。世界的にそれほレベルの高くない東南アジアの中でも成績は下位のほうである。そもそもフィリピン人はサッカーにあまり関心を持っていない。二〇〇二年の日韓ワールドカップの開催中でも、地元のテレビは夜中にその日の試合の中から一試合を録画放送するのみでリアルタイムでは試合たりとも放映していない。決勝戦は衛星放送の画像を映す大画面を備えた高級ホテルのバトラウンジで放映され、多くの外国人が軽食・ドリンク代を支払って観戦することになった。

さてフィリピンで一番の人気スポーツと言えばバスケットボールである。一般的にフィリピン人は体格的に恵まれていない。平均身長は日本人より低いのではないかと思えるほどである。身長が大きくなるを言うのは

フィリピン人は得意なスポーツは「バレー」とよく言われる。ABAとはバスケットボールヒリアードボウリングの三種である。これらのうちの二つがボクシングと入れ替わることもある。特にヒリアードは世界に通用するレベルで、テレビのスポーツチャンネルで放送されている世界大会でフィリピン人選手が活躍する姿を見ることが出来る。ボウリングもアジア大会でメダルを獲得するなど高いレベルを保っている。

フィリピン人は得意なスポーツは「バレー」とよく言われる。ABAとはバスケットボールヒリアードボウリングの三種である。これらのうちの二つがボクシングと入れ替わることもある。特にヒリアードは世界に通用するレベルで、テレビのスポーツチャンネルで放送されている世界大会でフィリピン人選手が活躍する姿を見ることが出来る。ボウリングもアジア大会でメダルを獲得するなど高いレベルを保っている。

Information

インフォメーション



国際交流基金の機構改革に伴い、「アジアセンターニュース」は今号が最終号となります。長い間のご愛読、ありがとうございました。なお、「アジアセンターニュース」のバックナンバーは、国際交流基金のホームページにてご覧いただけます。(URL:<http://www.jpf.go.jp/>)

アジア市民交流助成

日本とアジア諸国の一般市民同士の相互理解を深めることを目的に実施される各種文化交流事業の実施経費の一部を助成します。日本からの参加者があれば、2カ国間のみならず、多国間事業も対象となります。事業の実施地は日本国内またはアジア諸国内とします。営利活動・宗教活動・政治活動を含むものは助成対象となりません。

申請資格:日本国内の非営利団体、グループ、地方公共団体、国の機関、および国際機関を除く)

助成金額:一件あたりの上限額は100万円(平均助成額は約50万円)

申請締切:04年5月6日(木)04年8月05年3月の間に実施される事業(04年9月1日(水)04年12月05年3月の間に実施される事業)

申請書請求先:5月6日申請締切分:
〒107-0051 東京都港区赤坂二丁目21-1 赤坂ツインタワー1F 国際交流基金アジアセンター 国内事業課
TEL:03-3556-1138 9-2
FAX:03-3556-1138 9-7

電子メール: asiagrant@jpf.go.jp
なお詳細は、国際交流基金ホームページ(http://www.jpf.go.jp/about_jp/program_jac.html)を参照してください。申請書様式もダウンロードできます。

次世代リーダーフエロシップ募集

国際交流基金アジアセンターはアジア地域と日本との知的対話ネットワークを構築し、地域共通の課題解決を担う次世代の人材育成を図るため、日本の大学院生や非営利団体職員を対象に「リーダーフエロシップ」を実施します。

応募資格:以下のすべてに該当する方
1)アジアを地域的な対象として取り上げる、人文・社会科学系の大学院生。もしくは、国際交流・国際協力の分野でアジア地域との共同作業を進める日本国内の非営利団体の専従スタッフとして2年以上勤務経験のある方
2)申請時の年齢が40歳以下の方
(対象国での調査・研究を行なうつうえ

で必要な語学力を有する方
4)日本国籍を有する方。もしくは日本国内に永住を許可されている方
対象国:東アジア・東南アジア・南アジアの各国
募集人数:4~5名
期間:3カ月(1年)ただし04年9月以降05年3月までに出発できる方)
待遇:往復渡航費、月額奨学金、他諸手当を支給

調査・研究の内容:フェロシプの関心分野における調査・研究、現地滞在期間中は、現地の研究機関や非営利団体等を受け入れ先として特定することが必要となります。非営利団体職員による大学での研究や、大学院生のNPO調査も対象となります。

応募期限:04年4月12日(月)04年5月7日(金)消印有効
募集要項:応募書類をご希望の方は、国際交流基金のホームページ(<http://www.jpf.go.jp/>)からダウンロードするか、90円切手を貼付した返信用封筒(長3形)に住所・氏名を明記して左記までお送りください。

問い合わせ先:(財)国際文化交流推進協会 次世代フェロシプ係
〒107-0051 東京都港区赤坂一丁目21-1 赤坂一丁目森ビル4F
TEL:03-3556-1144 211

国際交流基金の機構改革について

平成十五年十月一日をもって国際交流基金は、独立行政法人国際交流基金として新たなスタートを切りました。これを機会に一層効果的・効率的に事業を実施するよう、また、国民のみならず、とくに身近で親しみやすい存在になるよう、にさまざまな改革を進めています。この改革の一環として平成十六年五月六日からこれまでの国際交流基金事業を、文化芸術交流、日本語、日本研究・知的交流の三分野に整理、再編成いたします。

各分野で、事業の目的と達成目標をより明確にし、同時にプログラムの統合、廃止、簡素化を行なうことで、機動性に富んだ事業展開ができるようついにまいります。

また、新しく「国際交流基金情報センター」を設け、国際交流に携わる方々の連携を図り、その活動を支援するための国際交流情報をみなさまに提供していきます。

機構改革については、国際交流基金のホームページでもご覧いただけます。(URL:<http://www.jpf.go.jp/>)

アジアセンター オフィス・スペースの閉鎖・移転について

上記の機構改革に伴い平成十六年四月三十日をもって現在のアジアセンターのオフィス・スペースを閉鎖いたします。五月六日より、アジアセンターで実施してきた各種事業を含めた国際交流基金本部の業務を、アーク森ビル(2011階)の業務をアーク森ビル(2011階)に移転し、(港区赤坂一丁目21-1)にて行ないます。

また、アジアセンターライブラリーはアーク森ビル20階の国際交流基金図書館に統合されることとなりました。同ライブラリーは移転準備のため、平成十六年四月三十日をもって一旦閉鎖いたします。また、同年四月一日より、海外の新聞一部雑誌の収集および閲覧を中止させていただきます。移転後の業務再開は平成十六年十月を予定しております。なお、国際交流基金プログラムはこれまで通り運営いたします。

お詫びと訂正

25号巻頭座談会「東南アジアのキリスト教」の記事中(5ページ)の「司父ハカ所」は「司牧」の間違ひでした。お詫びして訂正いたします。(編集部)

編集後記

「アジアセンターニュース」は今号が最終号となります。創刊以来、さまざまなご意見や励ましのお言葉を頂戴し、本当にありがとうございます。これからもアジアセンターで実施してきた各種事業は、今後も新たな組織下で引き続き実施されます。読者のみなさまには、国際交流基金の対アジア事業に一層の関心をお寄せいただきたくと心よりお願いいたします。(八) ご愛読いただきましたこと、心より御礼申し上げます。(清水)



独立行政法人国際交流基金 アジアセンター
The Japan Foundation Asia Center

アジアセンターニュース

第26号 2004年3月発行

発行: 独立行政法人国際交流基金アジアセンター

東京都港区赤坂2-17-22 赤坂ツインタワー1F

電話 03-5562-3891 FAX 03-5562-3897-8

編集協力(財)国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)

レイアウト: 白谷敏夫・武藤まりも(ノマド)

印刷(株)カンニチ印刷

©独立行政法人国際交流基金

Asia Center News

The Japan Foundation Asia Center

Akasaka Twin Tower 1F, 2-17-22 Akasaka,

Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan

TEL: 03-5562-3891 FAX: 03-5562-3897-8

© The Japan Foundation

本誌記事の無断転用を禁じます。

本誌は古紙再生紙とベジタブルインキを使用しております。